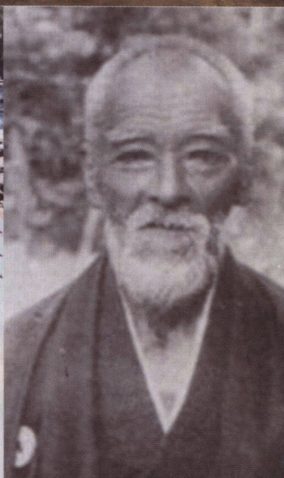


庄内歴史読本



庄内歴史読本の発刊によせて

庄内地区まちづくり協議会 会長 釘村 美千也

庄内地区まちづくり協議会は平成22年に設立され、庄内地区スポ・レク大会、庄内ふるさと祭り、庄内川一周Y O U遊駅伝大会などのイベントの実施をはじめ、自治公民館活動部会、地域づくり部会、教育文化活動部会、健康福祉部会、環境整備部会の5つの部会でさまざまな活動をしています。

教育文化活動部会では平成23年11月から庄内中学校1年生を対象とした地域巡見学習を実施しています。庄内地区には多くの歴史的建造物や史跡が残されていますが、中学生の多感な時期にこれらの地域の宝を見学し説明を受けることにより、郷土に対する愛着と誇りを持ってもらうことを目的としています。

参加したみなさんの感想文を読みますと、地域にこんな素晴らしい歴史があったことに感動し、もっと知りたいとの声が多く見られました。

幸い庄内地区には「庄内の昔を語る会」があり、庄内の歴史や文化の研究を続けておられます。平成元年から郷土誌「庄内」を発刊され、現在21号まで続いています。多くの埋もれた歴史や史跡を掘り起し、記録し、後世に残す大事な作業を続けてこられました。この本は「庄内の昔を語る会」の方々に原稿をお願いし出来たものです。

まちづくり協議会では、庄内地区に残る史跡の保存に力を入れ、また案内看板なども設置しています。みなさんは将来庄内を離れていろいろな場所で、勉強や仕事をするようになるかも知れませんが、どうぞ庄内の出身だということに誇りを持ち、いつの日か庄内に戻って来て欲しいと願っています。

平成29年3月



中学生のみなさんへ

庄内の昔を語る会 会長 山下 謙二郎

「わたしたちの日本列島のいたるところで、人々は何万年の昔から今日まで、生き続けてきました。」

その日本列島の中の点ともいえるこの庄内の地域でも、大昔から人々が暮らしてきました。激しい台風の中で、霧島・桜島の大爆発による降灰の中で、森を切り開き、大地をたがやし、洪水とたたかい、生き続けてきました。そのような気候や自然とくらす中で、数多くの文化をつくりあげてきました。

みなさんの通学する道は、これまでにどれくらいの人が歩いてきたでしょう。川に架かっている橋、道の脇を流れる小川や、水路、ひろがる田、それらは誰がつくり、誰がひらいてきたのでしょうか。あちこちにある神社はいつ、だれが建てたのでしょうか。その神社でどんなことが行われてきたのでしょうか。人々はその神社で何を祈って来たのでしょうか。稲の豊作を願って来たのかもしれませんが。また戦争中は、戦地に行った家族が無事で帰ってきますようにとお参りをしたこともあったでしょう。

ちょっと立ち止まって考えるといろいろな思いがわいてきます。そしてそこには、ながいながい間、営み続けてきた人々の歴史が刻み込まれているはずです。

この本は、いろいろな時代に、この庄内の地域で生きた人々の暮らしの様子や、遺跡・史跡、民族芸能などをまとめたものです。また、この地域の動きは、よその地域ともつながり、もっと日本全体とつながり、世界の動きにつながっていることでしょう。小・中学校で習う日本の歴史の中に、副読本「庄内の歴史」を位置づけてみてください。そうすると、この地域だけで起こった出来事や、他の地域にも同じような出来事があったことを発見するかもしれません。特に庄内には、都城島津家初代の北郷資忠の墓があります。諏訪神社は、北郷資忠が建立したものです。そのほかの史跡もたくさんあります。

この「庄内の歴史」をきっかけにして、いろいろなことを発見出来たら、素晴らしいと思います。

平成 29 年 3 月

目 次

庄内歴史読本の発刊によせて	1
中学生のみなさんへ	2
庄内の歴史	5
地名「庄内」の誕生と移り変わり	
庄内の遺跡	
原始・古代の庄内	
中世の庄内	
近世（徳川時代）の庄内	
幕末の庄内	
明治時代	
大正時代	
昭和時代	
三島通庸公による庄内のまちづくり	43
太平洋戦争の記憶	47
庄内の三大用水路	53
庄内の遺跡	59
庄内の史跡	67
庄内の民俗芸能	82
庄内の歴史年表	89
都城島津家歴代当主	91

庄内の歴史

地名「庄内」の誕生と移り変わり

私たちは現在庄内地区に住んでいます。庄内地区とは、葉子野町・乙房町・関之尾町・庄内町の範囲をいいます。しかし、「庄内地区」の地名は、これまでに長い歴史の中でいろいろな移り変わりがありました。明治時代に入る迄は、「安永村」といって、その中には「南川内村・北前川内村・西嶽村・中霧島村」が入っていました。当時の「安永村」には現在の庄内、西岳、中霧島が入っていました。また、その頃、現在の関之尾町は西嶽村の中に含まれていました。江戸時代の頃は「庄内」というと、都城盆地全体をいっていました。

明治3年(1870)正月に都城が分割されて、上庄内・下庄内・三俣の三ヶ郷が設置されます。そして同じ年の3月に安永村が上庄内郷に属します。その時、西嶽村の一部であった関之尾と川崎を安永村に入れ、これに南前川内と北前川内を合わせて一つの村としました。この時、中霧島村は別になっています。

明治5年の廃藩置県によって、上庄内郷を「庄内郷」、下庄内郷を「都城」としました。ここで初めて「庄内郷」ができました。そして、明治21年(1888)の全国的に行われた「市制町村制」によって「庄内村」という「庄内」の名をつけた行政村が誕生しました。この時、西嶽村も「庄内村」の中に入っていました。明治24年になって西嶽村の要望によって、「西嶽村」が誕生し、「庄内村」から分村しています。この時、はじめて「庄内村」は現在の「庄内地区」全体の地名となっていくのです。そして大正13年(1924)に「庄内町」となりました。

それでは、これから庄内地区の大昔(原始時代)からの歴史を見ていくことにします。

庄内の遺跡

庄内の地域でも遺跡発掘調査が行われています。その主なものを挙げておきます。

1. 丸山遺跡

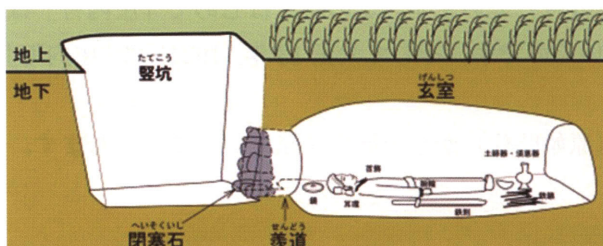
丸山遺跡は都城盆地を取り巻く丘陵群の一つ、東流する庄内川と横市川(ともに大淀川の支流)に挟まれた東に延びる丘陵上にあります。標高263mの高い所に位置しています。その東側には母智丘神社があります。現在はゴルフ場や熊襲公園広場になっていますが、ここからは縄文時代早期(10,000～6,000年前)の集石遺構と土器が発掘されています。また土器片もあり、その頃から人々が居住していたことがわかります。集石遺構とは次頁の写真のように石が集められたもので、石蒸し炉と考えられています。石には加熱された痕跡がある場合が多く、そうしたものについては人間が調理を行った跡だろうとさ

れますが、何の痕跡も無く用途不明の場合もあります。しかし、いずれにしても人間の手が加わってできたものには間違いありません。



2. 菓子野古墳群

菓子野小学校南側の畑の中（庄内川を南に見下ろす台地上）にはたくさんの地下式横穴墓がつくられており、現在までに15基以上が発見されています。中に入れられていた鉄鍬（てつぞく・鉄のやじり）の形や人骨の放射性炭素年代測定から5世紀中頃から6世紀前半に営まれた古墳と考えられています。地下式横穴墓とは地上から穴（竪坑・たてこ）を掘り、その底に遺体を入れる横穴（玄室・げんしつ）をつくる形の古墳です。



平成23年（2011）11月に発掘された古墳には、玄室が二つありました。一つの玄室には熟年男性と壮年。そして幼児、三体が葬られていました。もう一つの玄室には熟年女性が葬られていました。

熟年男性の横には鉄鍬（てつぞく・鉄製の矢じり）5本が置かれ、壮年男性の右手首には滑石製白玉（かっせきせいいうすだま・ビーズのような石製の玉）、B号熟年女性右手に貝釧（かいくしろ・貝の腕輪）が付けられていました。おそらくこの地域の首長クラスを葬ったものだろうと思われます。

この古墳の南側からは、縄文時代のものと思われる土器・石器・矢じりなどが出土しています。この古墳を中心にして周りにこの時代よりも前から生活していたことがわかります。



3. 金石城跡発掘調査

平成3年(1991)8月から12月にかけて金石城跡の発掘調査が行われました。金石城は安永城址の中の一つでした。そこがシラス採取のために失われることになりました。そのための発掘調査でした。その発掘調査の結果数々の遺構・遺物が発見されました。

調査の結果、建物跡28棟、通路跡3条、かまどあと5基、鍛冶工房跡一個所などが見つかりました。また、遺物として約1,000点が出土しました。その中には約2,500年ほど前の縄文時代の土器や石器がありました。また、金石城で生活していた人々が使っていたという、中国製や唐津・備前焼などの食器類、武具・馬具・銭、また籠城戦に備えて蓄えられたと考えられるコメなども出土しました。

4. 西脇遺跡

庄内小学校より南に下った十字路の所です。ここに消防団車庫兼詰め所が新築されるため、平成27年10月から11月にかけて発掘調査が行われました。その結果次のようなことがわかりました。

平安時代

掘立柱建物跡(ほったてはしらたてもものあと・写真①/写真②)や昔の人々が掘った穴(土坑・どこう・写真③)などが見つかりました。掘立柱建物は東と西にひさしのある少し大きな建物でした。

建物跡の南側からは中国から輸入された青磁も出土しています。また、土坑の一つからはふいごの刃口や台石などが出てきました。鍛冶(かじ・鉄を加工して道具などを作ること)などをしていたのかもしれませんが。

幕末～明治時代

土瓶どびんやお茶碗ちやわんなどの陶磁器とうじきがきれいに並べられた穴（写真④）が見つかりました。

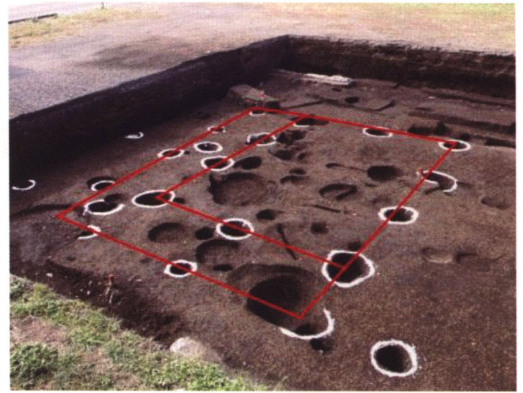
これはお墓の可能性が考えられます。また、このころの陶磁器が出てくる地層はかなり固く付き固められた造成土でした。

この発掘調査で分かったこと

庄内の町の中で初めて平安時代の遺跡が見つかったことです。これは都城盆地における開発が活発化する平安時代、人々の活動が庄内まで広がってきていたことを示しています。また、明治時代、三島通庸が行なった町づくりの様子が具体的にわかる遺跡が見つかったことも成果の一つといえます。



写真①



写真②



写真③



写真④

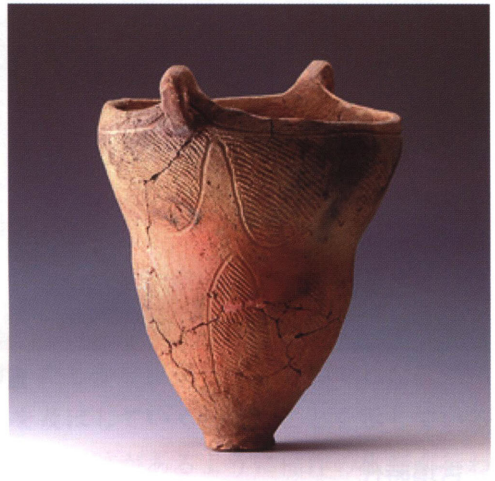
原始・古代の庄内 ～庄内にはいつごろから人々が生活していたのだろうか～

縄文時代

都城地域には今から約1万3千年前から人々が住んでいたといわれます。それは先に見てきたような遺跡発掘調査によって証明されています。

庄内地区でも庄内川を中心に庄内川南部の丘陵地帯、北部の大地には6,000年以上昔から人々が生活していました。その頃は照葉樹林帯が広がっていて、いろいろな木の実（クリ・トチ・シイ・ドングリ・クルミなど）や動物（イノシシ・鹿・ウサギなど）、川魚が多く存在していました。末吉と安久町の境にある尾平野洞窟からはイノシシ・鹿、サル・カモシカ・ノウサギなどの骨が見つかっています。イノシシ・鹿などを捕るために弓矢や落とし穴が利用されていました。

その頃の人々は自然にあるものを活用して生活していました。またその頃の人々は粘土を固めていろいろな土器を作り出していました。円筒型、甕型、深鉢型、浅鉢型などに縄目や貝殻などを押し付けた文様を施していました。その縄目の文様があることからその頃造られた土器を縄文式土器と呼んでいます。またそれらの土器を使用していた時代を縄文時代と言います。



この土器に水や木の実、貝などを入れて保存していたのです。

鹿児島県霧島市国分にある約8,000年前の上野原遺跡では、標高26メートルの台地に竪穴式住居跡などが発見され、「国内最古、最大級の定住化した集落跡」であることがわかりました。そこには、集石炉や、燻製用の施設であるトンネル状の煙道つき炉穴、貯蔵穴などの遺構が発掘されました。また、台地の中ほどにある水くみ場に通じる道も2本発見され、そのころすでに集団で生活していたことがわかります。

庄内の地域でも、庄内中学校運動場の敷地からこのころの土器破片などが見つかっています。庄内川を挟んだ河岸段丘は縄文時代の人々の生活の場であったのでしょうか。

弥生時代

一万年以上も続いた縄文時代も次の新しい時代を迎えました。弥生時代の到来です。今から約 2,500 ～ 3,000 年前です。その頃北部九州に水田稲作が伝わっています。

1986 年（昭和 61 年）からの発掘調査によって発見された佐賀県の吉野ヶ里遺跡では、約 50 ヘクタールの広さの中に広大な環濠集落が見つかりました。首長の居館や祭祀場所、竪穴住居、高倉式建物などが再現されています。

都城地方では、吉野ヶ里遺跡のような大規模な集落は発掘されていませんが、その頃の住居跡などが見つかっています。また、縄文時代の終わりごろの遺跡から米作りが行われていたことがわかっています。大岩田町の縄文晩期の黒土遺跡からは、土器の内部に米粒が混入していました。南横市町の「坂元 A 遺跡」では水田跡が発掘されています。現在のように方形に区切られたものでなく、楕円形など様々な形のものでした。またこの遺跡からは、その頃使っていた木製の田下駄や鋤、石包丁などが出土しています。庄内川の流域の湿地帯でも米作りが行われていたと思われます。



吉野ヶ里遺跡

古墳時代

米作りが始まり生産性が進んでいくと余剰生産物を生み出しました。その余剰生産物を握り、用水や農具などを管理する支配者が生まれてきました。そのような力を持った支配者を埋葬したのが古墳です。古墳というと箸墓古墳や西都原古墳にある前方後円墳など高塚式の古墳を考えますが、南九州の内陸では高塚式古墳もいくらかは存在しますが、大半は菓子野古墳のような地下式横穴墓です。副葬品に鉄鏃や滑石製白玉（かっせきせいうすだま・ビーズのような石製の玉）や貝釧（かいくしろ・貝の腕輪）があったということは、菓子野古墳に埋葬されている人物はこの地域の支配者だったのです。このことは、この地域でも集落が存在し、農耕が盛んにおこなわれ、この地域を支配する首長層（豪族）が誕生していたのです。

大和政権の下で

4世紀前半ごろより南九州地方にもヤマト政権の力が及んできます。それは宮崎平野や肝属平野の河川流域に首長墓群があることです。西都原古墳群、生目古墳群がつくられていることです。また、志布志湾に面した肝属地方には、5世紀初めの頃に唐仁古墳（とうじんこふん・鹿児島県東串良町）5世紀中頃に横瀬古墳（大崎町横瀬）の大型古墳があります。

このように宮崎平野・志布志湾沿岸の肝属平野に前方後円墳などを含む古墳群があるということは、この時期、この地域の首長層がすでに畿内を中心とするヤマト政権の中に組み込まれていたということが出来ます。しかし、都城を中心とした内陸部まではヤマト政権の支配の中に組み込まれていませんでした。

『古事記』（中つ巻）によると「景行天皇がこうすのみこと小碓命に、『西の方にはくまのそたける熊曾建が二人いる。これは朝廷に服従せず秩序に背く者たちである。だから、その者たちを討ち取れ』とおっしゃって、小碓命を遣わした。」そこで、「小碓命は熊曾建の家に行き、祝宴の日になると、少女のような髪形をして、女物の衣装を着け女たちの中に紛れ込んで部屋の中に入っていった。熊曾建の兄弟二人は、その乙女を見て気に入って、自分たちの間に座らせて、盛んに祝宴をしていた。そして、その宴のたけなわの時になって、小碓命は懐から剣を出し、熊曾の衣の襟をつかんで、その剣を胸から刺し通した。その時、その弟建はこれを見て恐れをなして逃げ出した。小碓命はすぐにこれを追いかけて、その室の梯子の下に至って、その背中うしろの皮をつかんで、剣を尻から刺し通した。」その時、熊曾建は、「『大和国には、私たち二人にもまして、強い男子がいらっしゃったのです。だから、私はあなたさまにお名前を差し上げましょう。今からは、やまとたけるのみこと倭建命と名乗られたらよいでしょう。』と申し上げた。」こうして熊曾建兄弟は征服されたという話です。いわゆる服属神話です。

この『古事記』は、和銅5年（712）に成立しています。また『日本書紀』は、8年後の養老4年（720）に完成しています。『古事記』も『日本書紀』も律令国家りつりょうこっか※¹をつくりあげるため、自分たちの天皇支配国家を根拠づけ、たしかな証拠とするものでした。

上の話は、当時ヤマト政権が日本の隅々まで力を及ぼしていくことを示している話です。また、都城盆地には弥生時代の早い時期の水田跡があるように稲作の生産が行われていました。そして、都城盆地が大隅国の重要拠点を結ぶ交通の要衝地であったともいわれています。都城を南下すると志布志湾があります。西に向かえば大隅国府の置かれていた霧島市国分があります。北へは、小林を経て人吉盆地へ至ります。このような土地はヤマト政権にとっては魅力のある所であったのでしょう。

※1 「律」は刑法。「令」は行政法などに相当するもの。中央集権国家統治のための基本法典。古代国家の一形態で、律令を統治の基本法典としたもの。7世紀半ばの大化の改新から奈良時代、平安初期まで約3世紀続いた。

律令体制の中に

大宝元年（701）に大宝律令がつくられ、日本全国をこの律令によって支配していくことになりました。今の宮崎県は、「日向国」と呼ばれ、臼杵郡、児湯郡、那珂郡、宮崎郡、諸県郡の五つを管轄することにしました。そして、児湯郡の妻（西都）に国府が置かれました。この国府には中央政府からの国司が派遣されていました。

都城は、諸県郡と言われていました。この「^{あがた}県」とは、天皇の直轄領のことで、地方の族長が服属の証として献上した田地を言います。そこには中央政府から派遣された役人がいて、都城は、早くから中央政府の支配の中に組み込まれていたのです。この地が前述したように早くから稲作が行われ、交通の要衝地でもあり、霧島山系を水源とするいくつもの川が流れ、その水源となる高千穂の峰は、「天孫降臨」の土地であるという言い伝えもあり、この地が古くからの聖域であり、魅力ある土地であったと考えられます。

島津駅

中央政府は、各地に派遣されている国司との連絡（命令伝達）、また国司はその地域内の政治・財政などの状況を政府に報告しなければなりません。このため、中央政府はそのような公務のために往来する官道と駅の整備を行いました。全国には「畿内七道」と呼ばれるブロックに東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道がありました。この「畿内七道」は都と各地域を結ぶ道（官道）でした。そしてその官道には、約16キロメートル（当時の30里）、ごとに駅が設けられました。駅家の任務は、官使のために乗り継ぎの馬や宿泊施設を準備することでした。各駅一人の駅長が置かれ、駅馬を養い、駅田を耕作する義務がありました。それらの駅には、20～5頭の駅馬が準備されていました。

東海道 中路、駅家ごとに10疋

東山道 中路、駅家ごとに10疋

北陸道 小路、駅家ごとに5疋

山陰道 小路、駅家ごとに5疋

山陽道 大路、駅家ごとに20疋

南海道 小路、駅家ごとに5疋

西海道 小路、駅家ごとに5疋

都城の地域には、「水俣駅」（山之口町）と「島津駅」（郡元町または高木町）にありました。しかし現在、駅舎の跡は見つかっていません。島津駅に準備されていた駅馬は「延喜兵部省式」によれば「駅馬 水俣 島津（各5疋）」とあります。

島津荘（しまづのしょう）

大化の改新で朝廷は、農民に土地を貸し出すという政策をとっていました。この土地のことを口分田といいます。しかし奈良時代になると、人口が増えてきたことによってこの

口分田が足りなくなってきました。土地が足りないと食料不足にもなりかねません。

そこで朝廷は、三世一身の法という法律を作って、この問題を解決しようとしてしました。723年にだされた三世一身さんぜいっしんのほうの法とは、朝廷から与えられた口分田とは別に、新しく自分で土地を切り開いた者には、その土地を3世代（孫の世代）まで自分たちの土地にしていよいよという法律です。

3世代とは言っても、当時の平均寿命は現代の3分の1ほどですので、実効支配できる期間というものはとても短いものでした。そして、荒れた土地を開墾するには大変な苦勞と時間がかかったために、農民たちからしてみれば、新しい土地を開拓する意欲もなかなかわきませんでした。そこで朝廷は次の手をうちます。次に登場してくる法律が、墾田永年私財法です。

743年に制定された墾田永年私財法こんでんえいねんしざいほうは、三世一身の法をさらにパワーアップさせた法律でした。

三世一身の法では、自分で切り開いた土地は孫の代まで自分の土地にしてもいいという内容でしたが、墾田永年私財法では、新しく土地を切り開いたらずっと自分の土地としてもいいというものでした。

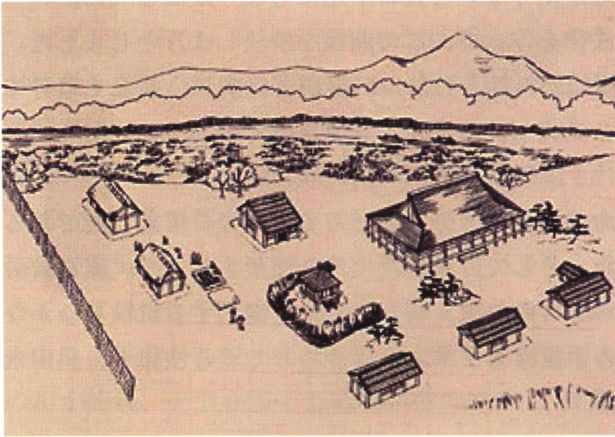
そのため貴族や寺社による開墾が進められました。当時、太宰大監であった平季基（たいらのすえもと）が、万寿年間（1024～28）今の都城地域の日向国諸県郡一帯を、当時の関白藤原頼通に寄進しました。これが「島津の荘」です。

太宰大監であった平季基がなぜここに目を付けたのでしょうか。都城地域は、日向国府から大隅国府に通じる官道があり、南島や大陸交易の拠点となった志布志和にも通じる道もあり、交通の大事な要となる場所であったからでしょう。特に南島でとれる赤木（経巻の軸木などに用いる）、蘇芳（染色に用いる）、夜久貝（屋久島で採れる）、紫（染料）、色皮（色染めたなめし皮）などの特産品があったからです。このような品は平安時代の貴族たちに珍重されていました。

『枕草子』の142段に「……………公卿・殿上人、かはりがはり盃とりて、はてには屋久貝といふ物して飲みて立つ、……………」（公卿や殿上人たちが代わる代わる盃をとってのみ、しまいには屋久貝一夜光貝というものに入れて飲みながら立ちあがって）と貴族たちの中でも珍重されていました。

「万寿年中無主の荒野の地を以て開発せしめ」とありますが、この地域は、もともと土地が肥えていて、農作物のよく実るところであり、在地の豪族たちによって切り開かれていました。太宰大監であった平季基がそのような都城盆地に目を付けたのは当然でした。また、在地豪族たちも、平季基をたより、その威勢・権威のもとで、国からの収奪を免れるという思いもあったからです。彼らはその後、島津政所まんどころの役人（長官）としてこの地方の経営にあたりました。

9世紀後半から10世紀中頃にあった豪族の館跡と考えられる金田町の「大島畠田（おおしまはたけだ）遺跡」（次図参照）があります。



館と中之島を有する池状遺構、外周をめぐる柵がセットで確認されています。のちにわが国で最大級の荘園となる島津荘が成立する直前の様相を示す遺跡として貴重です。国史跡に指定されています。

こうして始まった島津荘は、150年ほどたったころには、日向・大隅・薩摩の南九州三國に及ぶ大荘園となっていました。また、庄内でも平安時代にすでに人々の活動があったことを「西脇遺跡」の発掘によって証明されています。



中世の庄内

文治元年（1185）源頼朝は、諸国への守護・地頭職（※1）を置くことにしました。そして島津荘の下司職（げすしき・荘園を管理する人）に惟宗忠久を任命しました。惟宗忠久は日向・大隅・薩摩の守護と島津荘の地頭になりました。

惟宗忠久は、任命された荘園の「島津荘」の名をとって「島津」を名乗りました。都城市が「島津荘並びに島津家の発祥の地であり、総称して『島津発祥の地』』と呼ばれているのです。

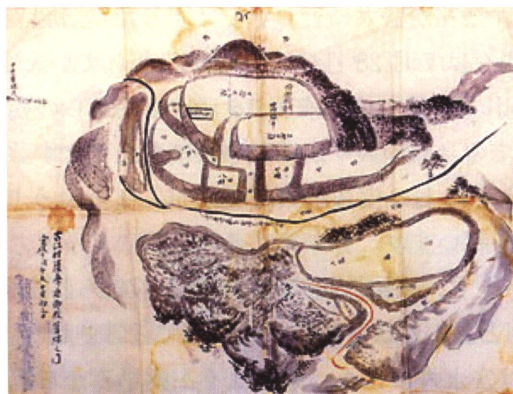
しかしその後、建仁3年（1203）鎌倉幕府内での権力闘争に連座して日向国・大隅国守護職、地頭職を没収され、北条氏が掌握することとなりました。

※1 地頭とは、全国の公領や荘園の管理をするためにおかれた役職です。

守護とは、地頭が土地の管理をするために設置されたとすれば守護は、国の警備をつかさどる役所として設置されました。

北郷資忠（ほんごうすけただ）の入部

文和元年（1352）、北郷資忠（島津本宗家四代島津忠宗の六男）は、前年の観応2年の筑前金隈の合戦での軍功によって、足利尊氏から北郷三百町の地（現在の都城市の西部）が与えられました。そして、北郷資忠は薩摩迫（さつまざこ・いまの都城市山田町）に移り住みました。そして、北郷氏を名乗ることになりました。のちの都城島津家の誕生です。



薩摩迫絵図



山久院跡の資忠夫妻の墓

庄内東区の豊幡神社にある山久院跡には資忠夫妻の墓があります。

北郷家はその後「都島町に『都城』を築き移住するのだが、以後、都城島津家はほぼ一貫して都城の領主として存在」したのでした。

しかし、北郷資忠はその後すぐに都城盆地一帯を治めることはできませんでした。その後、南北朝時代、室町時代、戦国時代と日本の各地での戦乱が続きました。北郷家もその波の中で生きていかなければなりません。そうした中で応仁2年（1468）に6代北

郷敏久の時、安永勢田ヶ辻に安永城が築されました。一名鶴翼城つるばねとも言われ本丸、二之丸、金石かねいし、取添かきぞえと大きく四つの曲輪くるわによって構成されています。現在、金石城は壊されています。

北郷資忠の入部後、約200年間は数々の戦いがありました。そして、天文12年(1543)、北郷家中興の祖と言われる8代北郷忠相によって都城盆地を統一したのでした。

諏訪神社

北郷資忠が都城に向かうとき、鹿児島市の諏訪神社に参詣しました。その時、鎌が神前から飛んできて、資忠の袖の中に入りました。資忠はその鎌を大事に持って都城に入り、その鎌をご神体として、諏訪神社を創建したと言います。

鎌が袖の中に飛び込んできたというのはどんな意味があるのでしょうか。鎌は農具として農民にとっては大事な道具です。その鎌が袖に飛び込んだということは、農業を大事にせよ、農民を大事にして、その地域を治めていけ、という意味があるのではないのでしょうか。だから、北郷家は、この都城を代々治めて行くことが出来たのでしょうか。



諏訪神社は、代々都城島津家の尊崇が厚く、祭礼が盛大に行われていました。旧暦7月28日に「諏訪祭礼」が行われていました。現在は7月28日に六月灯が行われています。この「諏訪祭礼」は、都城領主の主導で行われていました。7月16日に領主からの祭礼実施が仰せ渡されます。すると、領内のすべての身分の人々はその準備にあたります。この祭礼には領主の直接参詣も行われます。7月13日、安永村の正祝子(しょうほうり・神主)が都城普請方を訪れて鍛冶屋に注連卸を行います。その後、各門農民によって、領主の通る道筋の整備、祭り会場の設営等を行います。諏訪神社境内に棧敷が設けられます。棧敷は、領主(島津の殿様)用、武士用、農民用と言ったように身分によって設営されます。

7月28日の祭礼当日は、領主参詣の道筋は安永村に住んでいる人々が朝早くから清めます。領主は朝6時に庄内の諏訪神社に向けて出発します。

※1 鍛冶屋に注連卸というのは、諏訪神社のご神体が、鎌であるので、農具類を作る鍛冶屋に注連縄を張るのである。

「その行列は総勢260人を数え、さながら行軍を思わせます。これは大名行列と類似していますが、その中には神馬の口引きを宮丸村・木之前村人が行い、鉄砲10挺持ちを本町、弓10挺持ちを三重町、槍10本持ちを後町の町人が行うといったように、武士以外の百姓・町人が加わっていました。この行列で諏訪神社まで進んでいきます。その道筋は、祭礼前に道普請によって整備、清められており、この大行列を道筋の人々は見るとは見せら

れることになるのです。また、御幡が奉納されますが、その願文には『国家豊饒』『武運長久』『天下泰平』『君臣快樂』『保内安全』と書かれています。領主が神社に到着する頃鳥居の内では領主御一門の者が待ち受け、領主の御棧敷を安永衆中30人が袴着用で警護します。社頭で舞楽などが行われ、やがて領主が御棧敷に入り、その正面に座ります。ここで門農民による相撲が行われますが、勝者には布2反が下賜されることになっています。この後、流鏝馬が行われ、最後にあげ馬が行われていました。流鏝馬終了後、地頭の酌で番頭・近習役などの武士役人に、また二、三ヶ所で御小姓役の酌でその他の祭礼参加者全員に酒が振舞われるのです。棧敷ではお菓子が振舞われ、以上で祭礼は終了します。」

諏訪祭礼の棧敷造りには安永村の地元百姓層が加わっています。安永村は、現在の菓子野町、庄内町、乙房町です。関之尾町は当時西嶽村となっていました。また、郷士では、阿久井家、益田家、白谷家、椎屋家、亀沢家、早田家などが領主の世話や神事にあたっていました。

現在諏訪神社の祭礼は、11月28日に行われています。

豊臣政権下の都城島津家

10代北郷時久の時代になると、豊臣秀吉に、唐船との交易で手に入れた砂糖や壺、茶碗、金板、金箔などを献上しました。そしてまた、日をおいて味噌百桶を贈っています。さらに、息子の北郷忠虎も秀吉に太刀、馬代銀子三枚^{*1}、鷹、紅茶などを献上しました（※1進物に際して、生き馬の代わりに送る金銀のこと）。このことは都城島津家が豊臣政権との直接的関係を結ぶための行動と思われる。

文禄3年(1594)に太閤検地と言われる「文禄検地」を全国的に行いました。それまで、各領主によってまちまちであった丈量を全国一定にし、各領国の生産力を統一しようとするものでした。田畑の面積については、1歩を6尺3寸四方、300歩を1反、田畑の等級を上・中・下・下々の四段階と定め、^{ます}枡を京^{しょう}枡(1升枡は、方4寸9分(約15センチ)、深さ2寸7分(約8センチ))に一定して石高を算定し、耕地1筆ごとに耕作者を検地帳に記載して年貢負担者を確定しました。

都城北郷氏のそれまでの石高は、3万7千石と言われていたが、この検地によって6万8千石の実高となりました。そのため、文禄4年12代北郷忠能は祁答院(宮之城)3万7千石の領主に、叔父の三久は平佐(川内)3千石に移されました。そして都城には伊集院忠棟(ただむね、またの名は幸侃・こうかん)が入ってきました。

庄内の乱

慶長4年(1599)3月9日、京都の伏見で伊集院忠棟が島津忠恒によって惨殺されました。江戸前期に編纂された史書『庄内陣記』に「伊集院幸侃は伏見に屋敷を構えたが、造営は結構を尽し、殊勲の居宅もおよばないほどで、まるで国主大名の格式で、非常におごり高ぶっていた」ということです。主君よりも上をいく勢いに任せた行動が惨殺された原因だ

というのです。しかし、伊集院幸侃が豊臣政権の重臣・石田三成や鹿兒島島津家17代当主島津義弘とともに進めてきた政策は、島津家の権力強化であったと言います。でも、義弘の跡を継いで18代当主となった島津忠恒は、どうして伊集院幸侃に反発し、殺してしまったのでしょうか。

「忠恒には、幸侃が、秀吉に取り入り8万石もの大封を与えられ、朝鮮に出陣もせず国元で権力をふるう「佞人」^{ねいじん}にみえた。国元からの補給がなく朝鮮で苦い思いをしたのも、幸侃が職務を果たさないからだという恨みがある。義久や周囲を取りまく家臣たちからも、幸侃に対する不満や恨みは日常的に吹きこまれていた。」

というのが幸侃を殺した理由であろうとされています。

しかしこの時、秀吉は亡くなっていましたが、豊臣秀吉から信頼され、秀吉から直接に8万石もの地行をもらっていたという身分の家臣を惨殺するということは、豊臣政権への反逆と受け取られてしまいました。だから、この忠恒の伊集院幸侃殺害という行動に対して、幸侃を信頼していた石田三成はたいへん怒りました。でも五大老の一人であった徳川家康は、島津忠恒を支援しました。

父・伊集院幸侃が殺害されたことで、伊集院忠真^{ただまさ}は都城に立てこもり、島津氏に対して兵を集めて戦いを構えました。都城の周りには、本拠都城を中心にして12外城があります。恒吉（曾於市）・末吉（曾於市）・財部（曾於市）・梅北・梶山・勝岡・山之口・高城・志和地・野々三（美）谷、山田・安永、ここに各砦がありました。これらの砦に伊集院忠真は兵を置いたのです。

一方、島津方はその12外城に通じる道を遮ってしまいました。そして、12外城を囲むように島津忠恒の軍が取り囲みました。慶長4年6月3日、忠恒は高崎町東霧島神社の所を本陣としました。6月23日午前6時、忠恒の軍勢は山田城を攻め、11時ごろ山田城を攻め落としました。その日、都城から南のはなれた所にある恒吉城も落城しました。しかしその後、戦いは続き、翌慶長5年になりました。2月6日、志和地城では兵糧が尽きて降服しました。2月の末になって梶山、勝岡、山之口が、3月1日には高城が、2日には安永、野々三谷が落城しました。

その中でここ庄内（安永城）でも激しい戦いが行われました。その戦いのあった所は、乙房の小松が尾や戦場原です。稚児桜のある台地です。

戦場原での戦い

安永城には伊集院忠真が最も頼みとしていた、白石永仙という武将がいました。慶長4年12月8日、白石永仙は安永城の軍兵500騎を諏訪山^{ふろふたん}、風呂谷^{げいがたん}、枳ヶ谷にそれぞれ伏兵としておきました。永仙は45人の家来を引き連れて、島津軍のいる山田城へ向かいました。そして山田城に遠くから矢を射かけました。それを見て、山田城にいた川上四郎は、「これは我々を誘い出すためのものである。きっと伏兵がいるに違いない。一人も追って行くことはするな」と告げましたが、富隈の肥後壱岐は、老巧の武者でしたが、若い武士たち

に「敵を打つのは今だ。伏兵などがいるはずはない」と下知しました。それで種子島の軍勢 200 騎が城より打って出て我先にと追いかけてきました。永仙たちは相手の軍勢をうまく引き付けながら退いていきます。攻める軍勢は勢いに乗って攻め立ててきました。永仙の合図でホラ貝が鳴らされると、それまであちこちに潜んでいた騎馬たちが、種子島軍勢を取り囲み攻撃を仕掛けました。種子島軍は不意を襲われ、また方角を失って逃げまどい、右往左往し、中には田のぬかるみに入り込み、泥にまみれて動きが取れなくなったところを安永軍に打ち取られてしまいました。

その後も安永城の一つ金石城では、茅や竹を組み上げ火をつけました。その煙はもうもうと高く立ち上っていきました。これを見て島津の側は、安永の城が落ちたと言って軍勢を差し向けようとしていました。しかし、北郷氏の中の老武者が、「これはおかしい。まだ安永城に攻め込む先に落城とはおかしい。これまでも伊集院軍のはかりごとによって失敗したではないか。うっかり相手のはかりごとに乗ってまた失敗してはいけない」と諫めましたが、若侍たちは、「なんと臆病な。一時の猶予もならない。今こそ打って出る時だ」と言って安永城めざしていきました。また、総大将島津忠恒も自ら馬にまたがり出撃しました。しかし、この時も島津軍が攻め入る左、右、後の三方より待ち伏せていた伊集院の軍勢が襲い掛かりました。島津軍はやっとの思いで切り抜けて、総大将島津忠恒も何とか難を逃れました。

「新納忠元勲功記」によると、「老巧の武士たちが、相手の意図を見破り差しとどめたけれども、若い者たちはすでに駆け出して、百人ばかりが戦死した」と書いてあります。また、このことを聞いた島津義弘は、「戦いの中には古風とか現代風とかいっても、大して変わったやり方があるわけではない。若い者たちが何を提案しても、どうなるかよく考えることが大切である。ぜひぜひ年寄りや戦巧者へも熟談し、戦死者のないように分別なさい」と息子の忠恒に教え諭したということです。

小松が尾の戦い

志和地の森田に本陣を進めた島津軍は、膠着状態の戦況に焦りを見せ、本陣から直接伊集院軍の本城都之城に攻撃を仕掛け兵を出しました。大根田から志比田にやって来た時、伊集院軍と遭遇しました。そして、乙房の小松が丘まで押し返され、ここで大乱戦となり、敵味方多数の戦死者を出しました。現乙房神社の南付近で、今は整地されて昔の姿を留めませんが、多数の遺骸を葬ったという「センカンヤマ」はそれまでは人の足を踏み入れない寂しい所であったと言います。

稚児桜

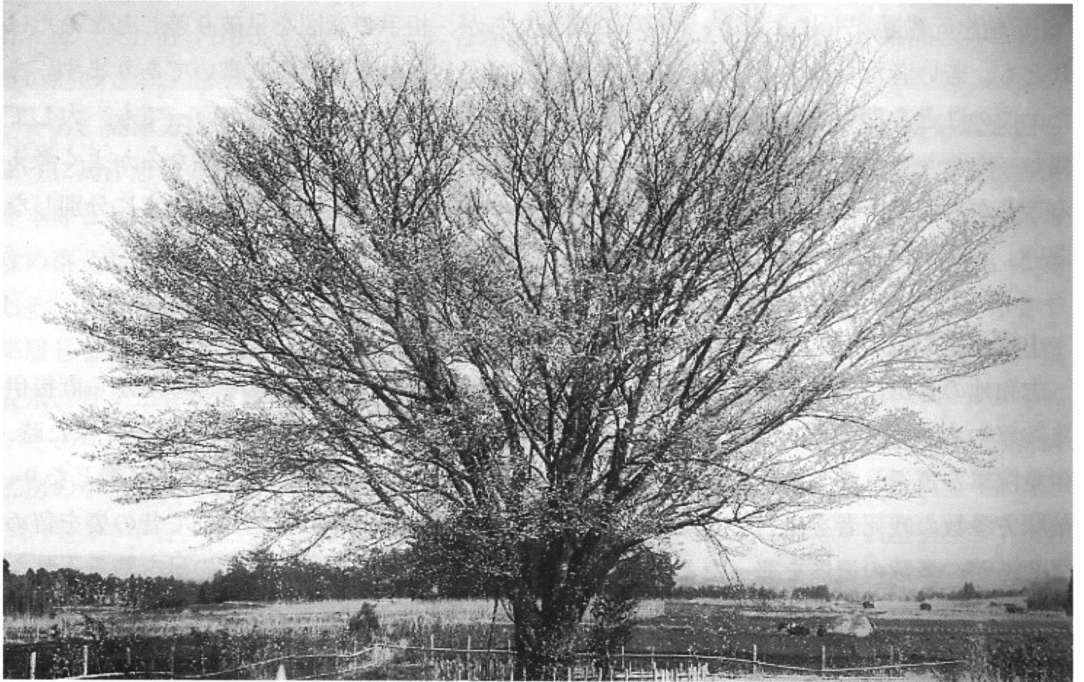
さて、この戦いの中で、お互いに多くの戦死者を出しました。その中で今も伝えられている話があります。伊集院軍の中にいた富山次十郎という若武者のことです。富山次十郎は 15、6 歳の少年でした。顔立ちがきれいな美少年でした。彼は風呂谷の上で相手の放っ

た鉄砲にあたり、あえなく命を落としました。その死骸を葬りましたが後々まで麝香のにおいが漂っていたと言います。このことを聞き、島津の新納忠元は次のような歌を詠みました。

「きのふまで誰が手枕に乱れけん 蓬がもとにかかる黒髪」

また、そのあとに桜が植えられました。その桜は「稚児桜」と名付けられ400年ほどありましたが昭和48年（1973）老齢のため枯れてしまいました。その後、枯株だけが残っていました。そこは今も「史跡 稚児桜」として残されています。「庄内の昔を語る会」の年刊誌『庄内』9号の表紙には、その枯株が写されています。

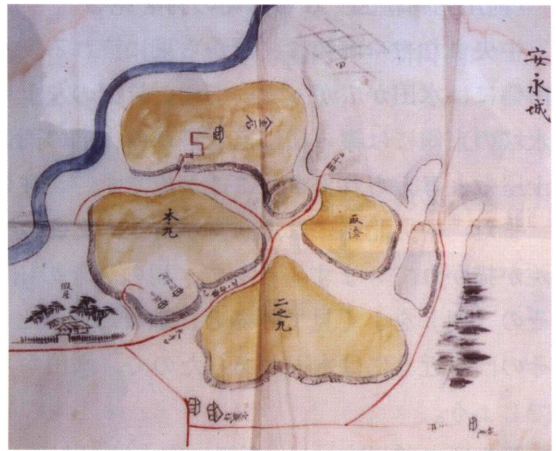
慶長5年3月15日、伊集院忠真はついに降伏し、都城の城を退去しました。そのあとには、宮之城の祁答院に移されていた幼少の北郷長千代丸が帰ってきました。この戦いでは、豊臣方に信頼があった伊集院幸侃・忠真たち、それに対する島津忠恒には徳川家康が陰で後押ししていました。この庄内の乱について、「その本質は、島津家内部に押し付けられた豊臣体制の否定であった」とも言われているのです。庄内の乱の後、関ヶ原の戦いがあり、やがて徳川家康は征夷大將軍となり、徳川時代に入っていました。



往年の稚児桜

近世（徳川時代）の庄内

「近世の都城は、鹿児島藩に属し、都城島津氏が支配した私領地でした。鹿児島藩は領内を百十三の地域（外城、のちに郷という）に区画し、それに地頭などをおいて支配するという制度を採用していました。その制度を『外城制度』と呼んでいます。その中で領地を宛がわれて、そこを直接支配する私領主がおり、都城は藩内最大の石高を誇る私領でした。」「都城では、『五口六外城』という11の地域に区画し、それぞれに地頭をおいて支配させていました。11の地域とは、『五口』が弓場田口・来住口・大岩和田口・中尾口・鷹尾口、『六外城』が安永・山田・志和地・野々美谷・梶山・梅北です。」現在の庄内は安永外城でした。



1603年江戸に江戸幕府が開かれました。そして、元和元年閏6月13日（1615年8月7日）江戸幕府から一国一城令が出され、安永城も廃城になりました。しかし、『庄内地理志』巻74には次のようなことが書かれています。

「安永に仮屋を建てたのはよくわからないけれど、寛永14年11月2日と書いた日記にどこに住んでいたかわからないものが、安永仮屋に住んでいたという」とあります。一国一城令が出されてから約20年後の寛永14年（1637）にはすでに安永仮屋が存在していたということになります。ここですでに安永外城（現在の庄内地域）の政務を行う役所が設置されていたということです。

この役所の責任者は地頭でしたが、地頭は都城麓に居て、任地に赴任しないので、この外城の政務を担当したのは、「^{あつかい}暖」でした。安永の暖として就任していたのは、『庄内地理志』・近世3に、宝永5年（1708）には蒲生六郎左衛門・蒲生太右衛門・神田諸兵衛、貞享3年（1686）には神田正右衛門・亀沢諸右衛門・椎屋伝左衛門、同じ年別の月には和田八郎兵衛・山下藤左エ門・満木順右衛門・石崎神左衛門といった人々の名が見えます。このように暖として3名～7名程度の定員であったと考えられます。

南前用水路の開発

都城藩は、生産力向上のため新田開発を進めていました。貞享2年（1685）に16代・島津久理ひさみちの命によって、家老川上久隆が中心になって建設・完成させました。この工事は、関之尾の滝の右岸の滝の上流から100メートルの岩山を掘り抜き、川崎、平田、乙房までの12キロメートルの用水路を完成させ、600ヘクタールの水田を灌漑しました。この用水路を「南前用水路」と言います。

関之尾の滝駐車場から滝へ向かって降りていくと、すぐ右側の切り立った岸壁の下に埴輪をかたどった社があります。川上神社です。ここには島津久理とともに、明治になってから北前用水路を開発した、坂元源兵衛、前田正名が祭っております。

「前川内村絵図」から当時の村を見る

中央よりやや南側に、西から東に流れる安永川が描かれています。その安永川の北側と南側には水田が広がっています。絵図の左上（北西方向）に安永城が描かれています。安永城の東側には縦・横に道が描かれ、道の両側に屋根をかたどった絵が並んでいます。郷士屋敷と考えられます。ここが麓です。現在の東区になります。

また、中央北側には諏訪宮があり、文殊院、山久院、妙見、宝蔵坊、釣璜院と神社・寺院が描かれています。そして、川の周りの田を囲むように「門」の名が点在しています。その「門」をよく見てみると、数軒の屋根と、それを囲むように木立が描かれています。その門の近くには水田があったので、水田から眺めると、屋敷の木立と屋根が見えたことでしょう。

その頃の前川内村は、西側に安永城があり、東に向かって麓、門と円を描くように広がっていました。



前川内村絵図（都城島津邸所蔵）

門（かど）と門割制度

鹿児島藩では「門割制度」といわれる農民の耕地の割り替えが定期的に行われていました。それは江戸時代、安永外城（現在の庄内地区と山田町中霧島など）でも行われていました。「門割制度」というのは、藩が検地をおこない、その土地からとれる米の石高を20～40石とし、5戸～10戸の百姓の家で編成された地縁・血縁的な単位を「門」といいました。その「門」のリーダーを「名頭」（みようず・みようとう）といい、その構成員を「名子^{なこ}」といいました。その「門」がいくつか集まったものを「方限^{ほうぎり}」といい、その長を「名主」といい百姓身分が就任していました。その方限がいくつか集まって「村」となっていました。村の行政運営は、武士である「庄屋」を中心に行われていました。

江戸時代の前川内村（現在の庄内地区）には次のような方限、門がありました。

平田

王子門 本平田門 福永門 上和田門 和田門 今平田門 新町門

續山門

蔵満門 徳留門 満永門

大久保

大久保門 小久保門 益留門

引土

徳丸門

筋

筋ヶ久保門 定増門

乙房丸

乙房丸門 中島門 中吉門 馬籠門 月野門 立野角 権現地門

吉永門

来住門 宮之元門

神田

鶴村門 中村門 七牟禮門 宝満門 堂領門 富田門 本島中門

今島中門

吉村門 今堀門 本堀門

今屋

城村門 福田門 岡元門 田中門 今屋門 外今屋門 今山元門

平山門

永岡門 花村門 本山元門

菓子野

菓子野門

宮島

上宮島門 下宮島門 今村門

鵜之島

内村門 鵜之島

以上 55 の門がありました。おやっ、現在の関之尾町がありませんね。どうしたのでしょうか。江戸時代は、関之尾町は西嶽村に入っていました。

西嶽村関之尾

大藪門

西嶽村田中

上花原門 寺山門 上柳門 田中門 下花原門 大門門

西嶽村川崎

川崎門 木之下門 竹之中門 中藪門 橋口門

西嶽村佐土平

佐土平門

江戸時代はかなりたくさん門が存在し、多くの百姓衆が日夜懸命に働いていたのでしょう。この時代、農民たちは「タノカンサー」（田の神様）を作り稲の豊作を祈りました。

なお、天正 17 年（1589）唐の船が鹿児島県の内之浦海岸にやってきて交易をおこなっていたようです。その後もたびたび寄港しています。『庄内地理志』の近世史料編に「唐土明朝時、国王暴悪にて、国人出奔して来るもの供御抱え、安永諏訪馬場へ被召置と也」とあります。中国の明の時代に、国王の暴政が行われそのため明の国を逃げだした人々があつたのです。そうした人々が内之浦に漂着したというのです。それを都城島津氏は召し抱え、庄内の諏訪馬場（諏訪神社前の通り）へ住ませたというのです。その後、都城市中町中央通りに「唐人町」をつくっています。

江戸時代の寺院

現在、庄内のお寺といえば「清涼山願心寺」だけです。しかし、江戸時代には 14 の寺院がありました。現在もその跡をとめているのは、山久院跡さんきゅういんと釣璜院跡ちようこういんの 2 ヶ寺だけです。そのほか記録によると文殊院・宝蔵坊・東洋軒・涓春庵・福持庵・市頭庵・長溪庵・新田寺・即源院・大儀院・明星院・直指庵の 12 ヶ寺を数えました。その後、釣璜院や山久院に併合されたりした寺もあります。また、記録された時点で壊されていた寺もありました。

ところが幕末から明治初年にかけて、行われた廃仏毀釈はいぶつぎしやくによって当時残されていた寺院の仏堂や仏像仏具類が破壊され、経典は焼かれ、半鐘などの鉄器類は藩に没収されました。特に鹿児島藩（薩摩藩）では他の藩より積極的、大々的に行われその規模も大きかったと言われます。鹿児島県の志布志の豊満寺の入り口には壊された仁王像を針金でつくろって設置してあります。

山久院跡と釣璜院跡は今も残り庄内の史跡となっていますが、ここもお寺の範囲はもっと広がったようです。戦後もしばらくは、今の庄内 JA の倉庫下の藪の中に破壊された石

塔が散らばっていました。また、山久院の北郷資忠夫妻の五輪塔の脇には、不完全な石塔がありますが、これらも廃仏毀釈の時破壊されたものでしょう。庄内小学校の西側にある北に向かった道路を「柵馬場」といいますが、その三差路の角に不完全な石像があります。これも宝蔵坊にあったものだとされています。

江戸時代に庄内の限られた地域で14を数える寺院があったということは、多くの人が生活し、仏教を信仰する人々がいたということです。

かくれ念仏

慶長2年（1597）2月21日に、島津義弘によって一向宗（浄土真宗）が禁止され、以後、薩摩藩は一向宗の信仰を禁止しました。それは他の地域で一向宗信者が、領主に対して反乱を起こしたからだと思われています。

応仁元年（1467）応仁の乱が始まり、約10年間続きます。それによって国の中は乱れ、応仁の乱以降、1世紀にわたって一向宗門徒を中心に一揆が各地で起こりました。その中でも「加賀の一向一揆」といわれる一揆では、蓮如上人の布教活動の中で農民層が勇気づけられ、1470年代に加賀で百姓たちが蜂起しました。この一揆で、領主の富樫氏は自害に追い込まれ滅亡しました。そして、福井県の吉崎はその後、本堂、坊舎、庫裏、書院、門などのほかに、各地の末寺からやって来た門徒たちの宿泊所などが建ち並びました。そしてそこに、商人、大工、馬方などが続々と集まってきて、にぎやかな町が出現しました。その後、織田信長に倒されるまで100年間、「百姓の持ちたる国」と言われました。

一向宗が鹿児島藩領内に伝わったのは、室町時代中頃と言いますが、その頃、島津忠良は、法華宗とともに一向宗を嫌っていました。しかし、一向宗は領内に浸透していきました。だから、加賀一向一揆のようなことを恐れて、島津義弘は一向宗の信仰を禁止したのだと思われています。そして、たびたび弾圧を行いました。とくに、天保6年（1835）には門徒の大規模な取り締まりが行われて、門徒14万人が摘発されたと言います。この時、勝岡（三股町）や末吉（曾於市末吉町）の信者も摘発され、都城市で切腹させられています。また、取り調べは実に厳しいもので、正座させた太ももの上に板石を何枚も重ね白状を迫りました。今も山之口町安楽寺には、拷問石と殉教の碑があります。

鹿児島藩での一向宗禁止政策にもかかわらず、領内の人々の間では一向宗の信仰が続けられました。一向宗の寺院がなかったので、信者たちは地域ごとに「講」をつくり、本願寺との連絡をひそかに行っていました。「講は本願寺に献納する品物によって『仏飯講』・『焼香講』・『椎茸講』・『煙草講』・『蠟燭講』などと呼ばれて、門徒は山の中、洞窟、船上などでひそかに法座を開き、信仰を続けて」いました。庄内では乙房町平田に「かくれ念仏洞」があります。その頃のことを次のように語られています。

「私の祖母ヤソが嫁いできた家から念仏洞までは150メートル位あったらしく、法座の晩はいつもハザゲン（間食）を持って行ったそうです。割に近いのですが、役人の目をぬすんで暗い夜道を一人で通る時の恐ろしさは口ではあらわせない程でした。この念仏洞は

八畳ほどの広さで、仏飯講の人は北は高崎から南は末吉福山方面にかけての広い範囲の数だったようです。

法座の夜は、取締役人の目をくぐってこっそり集まっておこなわれるのですが、見つかったら極刑を免れ得ませんから役人に対する警戒は厳重でした。当夜は若い青年たちが、道の角角に立ち見張ります。役人の姿が見えるとすぐ近所の馬小屋に走り、後ろに回って庭箒で馬の尻を二、三回力一ぱいたたきます。驚いた馬は小屋を飛び出し部落中を駆け廻るのです。静かな真夜中馬の蹄の高い音と、青年たちの”馬がはなれた、はよつかまえんといかん”の大声とともに部落中大騒ぎの様子です。連絡員からこれを受けた念仏洞の信者たちは一人二人と穴をぬけ出し姿を消します。自分たちの信心を命がけで守る大衆の知恵でしょう。」(平田・和田吉雄)

このように一向宗（浄土真宗）を信じる人々は厳しい弾圧にもかかわらず自分たちの信仰を守り続けたのです。



現在の平田かくれ念仏洞跡

幕末の庄内

嘉永6年(1853)アメリカのペリー艦隊4隻が江戸湾入り口の浦賀にやってきて、開港を迫りました。翌年の嘉永7年ペリー艦隊の威力に屈した徳川幕府は、「和親条約」を結び、下田、函館の2港を水や食料補給の港として開きました。安政5年(1886)には、幕府の大老であった井伊直弼は勅許を得ないまま「通商条約」を結んでしまいました。その条約は、日本の輸入関税率^(※1)を決めるのに相手国との協定が必要であり、また日本で罪を犯した外国人を、日本の法で裁判できず、外国人が永久借地権、警察権を持つ居留地がつけられるなど日本の主権を犯す不平等条約でした。

(※1) 国は通常、関税自主権といって自国に入ってくる品物に自由に関税を掛けることができます。

これにより、米などの物価値上げ、生糸不足による西陣・桐生などの織物業の不況、金の国外流失、兵器・軍艦買い入れによる財政難、重税に反対する一揆・打ちこわしが盛んになりました。下級武士(勤王の志士)機業地の地主・商人たちは、幕府が勅許なしに条約を結んだことに反対し、尊皇攘夷を唱えました。

文久2年(1862)薩摩藩士がイギリス人を「無礼打ち」にした生麦事件が起きました。そのため翌年イギリス艦隊が、鹿児島を攻撃、犯人処罰と賠償金を求めました。薩英戦争と言われるものです。その後、徳川幕府は大政奉還を行い王政復古となり、徳川幕府は終わりを告げます。

しかし慶応4年(1868)、会津藩・桑名藩大垣藩・高松藩・伊予松山藩など旧幕府勢力は王政復古に反対しました。そのため旧幕府側の勢力と後の新政府側の間で「戊辰戦争」が始まるのです。

戊辰戦争と都城

鹿児島の薩英戦争、戊辰戦争には、都城からも新政府軍として参加しています。庄内地区から乙房町の馬籠良八という人が参加しています。その時の記録が残っています。

文久三年七月生麦事件に怒れる英国は、軍艦七隻を使用して鹿児島を征伐せしむ。急報都城に達背しかば都城兵を出して鹿児島に向う。良八等都城二番隊に編入され敷根に着く。既にして薩軍奮戦して英国艦隊を撃退せしかば、都城大戦争に間に合わずして帰還せり。

慶応四年、徳川幕府滅びし後も旧幕臣又は徳川氏に親しき奥羽諸藩の中には、幕府に対する旧誼を思いて順逆を誤り相率いて官軍に抗するものありしかば、朝廷群を出してこれを追討せしめ給う。

良八、五月二十七日わが家を立ち都城より他の人夫十四人と共に出発し翌二十八日鹿児島に着く。時に良八人夫長たり。

六月十一日、十三番隊、十四番隊、四番砲兵隊と共に汽船に乗り鹿児島を發つ。都

城出身者は各隊に分属し良八等朋友五人と共に四番砲隊に編入さるこれ等三隊は世にいわゆる門閥隊なり。四番砲隊長を河田掃部と称す。

六月十三日伊勢湾に入り、転じて三河に向い豊橋に上陸す。遠江、駿河、甲斐、信濃を経て越後の高田に着く。時に七月十日なり。ここにて各藩の兵と一所になり官軍と称す。

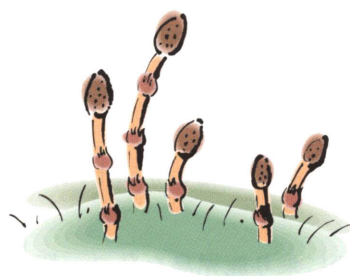
直ちに永岡、五仙、佐渡、新潟、新田、村松、村上等に転戦して敵を追い米沢付近まで進撃せり。途中新田に帰り会津に向い津川にて激戦数日に及べり。又天哉に戦う事数日敵は優勢にして容易に降らず関東兵と挟撃するにあたり、敵兵遂に支えること能わず敗走せり。九月十日より会津城に向い白虎隊の切腹せる岡のふもとに台場を築き盛んに敵城を砲撃す。九月二十三日敵城遂に落つ。

仙台城いまだ降らずと聞き会津を出発して白川に出づれば、すでに降伏（戦わずして）せしかば、奥羽地方全く平定し官軍東京にがいせんす。時に十月二十五日なり。東京新橋に明治元年と標柱にあり。諸軍始めて明治の御代なれるを知れり。明治大帝東京に御遷都遊ばれしより僅かに六日後なりき。江戸品川に陣すること十日間明治大帝より一時金を賜う。

東海道を行軍して京都に行き、京都より大阪にいること十日位、神戸に行つて汽船に乗り鹿児島にがいせんす。やがて軍を解いて帰宅せしは十二月二十九日なり。

庄内地区の他の集落から参加した人たちの名は、今のところ史料の中に見つけることはできません。

慶応4年（1868）9月8日に改元し「明治元年」となりました。翌明治2年（1869）5月18日 五稜郭が陥落、旧幕府軍が降伏して「箱館戦争」が終わり「戊辰戦争」が終結しました。馬籠良八の記録にあるように「東京新橋に明治元年と標柱にあり。諸軍始めて明治の御代なれるを知れり」とあるように、戊辰戦争が終結する前にすでに明治時代が始まり、日本は「近代国家」として歩き始めるのです。



明治時代

時代背景

明治になって、時代は大きく変わります。

明治維新により日本は、幕府、大名、武士が統治する時代が終わりました。

新たに設立された明治政府は、欧米列強による占領・侵略から国を守るために、近代的国家の建設を最重要課題として、富国強兵を掲げて資本主義化と軍備の拡充を目指し、近代産業育成政策として殖産興業を推進していくことになります。

まず欧米の工業製品や工業機械等の輸入とともに海外に人材を派遣し、また技術者や教師・医師・軍人を招聘して知識や制度、技術を学び、吸収し、短期間で産業や社会の近代化を成し遂げていきました。法律や制度をつくり、議会や裁判所をつくり、産業を興し、企業を育て、道路や港、鉄道を建設し、学校をつくり、軍事力を強化していったのです。

明治政府の下、地方の行政機関として、明治4年、全国に府・県が置かれました。また11年に郡区町村制、22年には市制・町村制が施行され、地方自治体としての市町村が誕生しました。

国の近代化を進めるためには、欧米の教育に倣った教育制度を導入する必要があり、小学校・中学校・大学校・師範学校、専門学校・その他各種の学校が設置されていきました。

生活面では、太陽暦が採用され、鬘を切り、洋服を着て、ランプが灯され、煉瓦造りの建物がみられ、道路が整備され、鉄道や電信電話、郵便事業も広がっていきました。貨幣は、円、銭、厘を単位としました。

一方、武士の解体により武士は士族と呼ばれました。やがて士族の特権であった家禄が廃止されるなど、その不満が明治政府へと向かい、西南戦争が起きました。これをようやく乗り越えた明治政府でしたが、近代化への国民の期待は大きく、欧米の自由思想を受けて自由民権運動が全国的に広まっていき、政党の結成や憲法の制定へと機運が高まっていきます。しかし、明治政府は、日本が対外的独立を達成するためには欧米列強に並ぶ強国の建設を第一とし、国家を個人に優先する国家主義に立たざるをえず、民権を抑圧しながら、天皇を中心とする国家主義的な大日本帝国憲法が明治22年制定され、当時ではアジア唯一の立憲制の国家が成立し、議会政治が始まりました。

議会は選挙で選ばれる国会議員から成る衆議院と華族（公家や大名であった人、明治政府に功績のあった人）から成る貴族院の二院で構成されました。選挙権は税金15円以上を納めている25歳以上男子に限られ、大地主など人口の約1%程度だったといえます。また、「学問は国民各自が身をたて、智をひらき、産をつくるためのもの」という近代市民社会的な教育観も次第に国家主義的性格を強く帯びるようになり忠君愛国的な教育観に変わって行きました。

このような国力増強政策により、日清、日露の戦争を経て、江戸幕府が安政五カ国条約を結んだ際の不平等性（関税自主権がないこと、在留外国人の治外法権を認めたこと）を

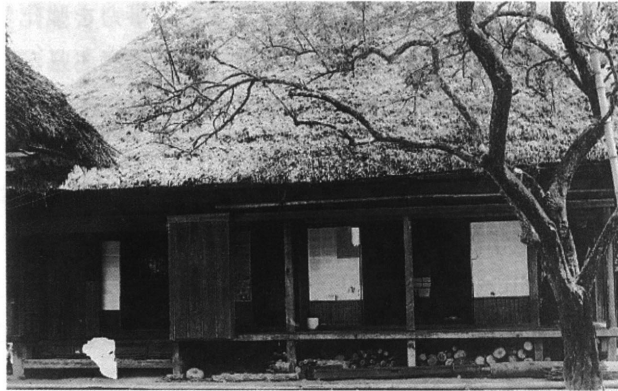
撤廃する不平等条約改正に成功し、列強の仲間入りを果たした時代でもあります。

行政

明治2年9月 三島通庸が、鹿児島藩から都城地頭に赴任。

通庸は、都城の検地を実施するとともに、都城を上庄内郷（庄内、西岳、山田、志和池、横市）、下庄内郷（都城、中郷）、梶山郷（三股）の三つに分割し、上庄内郷の地頭仮屋跡に居を置いて、治政を行いました。

上庄内郷においては、庄内小学校を中心とした市街地を開発し、近隣から士族や商家を招き、庄内の町の新しい基盤をつくりました。東区、町区そして西区の一部がそれです。街路の整備、庄内都城間及び庄内志和池間の道路建設、庄内川の堤防建設、茶や養蚕の勧め、学校の建設、母智丘神社・豊幡神社等の建立、兵制の整備などに努めました。



旧福留邸（三島が与えた家屋、一部は改造）

明治3年3月 上庄内郷建設の際、西岳村の一部（関之尾、川崎）を安永村の南前川内、北前川内と合わせて一村とし、安永村（現在の庄内地区）としました。

明治4年7月 廃藩置県により、鹿児島藩は鹿児島県となり、上庄内は庄内と改められました。（同時に下庄内は、都城となりました。）

明治4年11月 都城県が設置され、庄内はこれに属し、庄内郡治所下に置られました。

明治6年10月 都城県が廃止になり、宮崎県が設置され、庄内戸長役場が置られました。

明治9年8月 宮崎県は鹿児島県に合併されました。

明治12年 北諸県郡安永戸長役場が設置されました。

明治16年5月 宮崎県が再置され、これに属しました。

明治17年 安永の外に2カ所戸長役場が設置されました。

明治22年 町村制実施に当たり、庄内郷の中の安永の地域が庄内村（西岳を含む。）となりました。

明治24年 西岳より議が起こり、西岳は分村独立しました。

明治39年 庄内村是（村長 蒲生才蔵）

町村是は、「町村の経済等の現状を把握し、将来の町村の方向性を考えさせ、町村財政の改善を図ろうとする事業」で、全国的に展開された運動です。宮崎県では優良町村の調査を先行させるとして、13町村が指定され、北諸県郡からは「勉強」「模範」の庄内村が選ばれました。

※風俗人情： 質素勤勉にして順良の風あり

※繭の生産： 昨年、九州沖縄8県連合共進会において一等賞3名

※目標： 基本財産の養成、農業教育の普及、普通農事の改良、農具の改良、耕地整理、河川改修、勤勉貯蓄の励行、植林

※目標達成の手段： 「共同一致」、「誠」



役場は昭和10年までは庄内小学校の西側角付近にあった

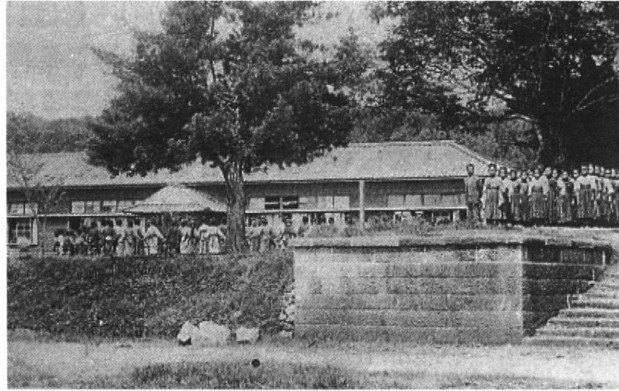
人口・戸数

- 明治13年 庄内（安永村）の戸数668戸、人口3,944人
（都城市域19村の中で、いずれも宮丸村、下長飯村に次ぐ規模）
- 明治21年 庄内（安永村）の戸数723戸、人口4,346人
- 明治39年 庄内村の戸数946戸、人口5,784人

学校

- 明治3年 三島通庸が鹿児島から招聘した三原叢五は、庄内小学校の南側で士族の子弟教育を行いました。
- 明治5年 学制発布により、庄内小学校開設
- 明治6年 乙房小学校開設
- 明治10年 菓子野分教場設置
- 明治20年 観瀾舎設立
- これは、「小学校卒業生以上もしくはこれに均しい学力のある者にやや高尚なる普通学科を授ける」という坂元源兵衛の発案により創設された私立学校でした。24年まで運営され、その後は青少年教育の道場として維持されました。
- 明治35年 石川理紀之助が、宮島地区の農家の子弟教育に努め、夜学校も開設。

明治44年 小学校は、甲組、乙組、丙組があり、甲組は男子、乙組は女子、丙組は早生まれの男女共学でした。



明治末期ごろの庄内小学校

戦争

明治10年 西南の役

これは、西郷隆盛を首領とする鹿児島士族たちによる反乱であり、新しい時代に様々な不満を抱いていた下級武士たちの反乱の中で最大規模の、最後の反乱でした。西郷軍が政府軍の攻撃を受けて都城から宮崎へ転戦する途中、関之尾周辺でも激しい戦いがありました。庄内郷からは西郷軍に218人が出陣し、56人が戦死しました。

明治27年 日清戦争が起こり、庄内村から88人が出征

明治37年 日露戦争が起こり、庄内村から189人が出征し、17人が戦死

産業

明治13年 庄内（安永村）の産業の状況

田363町、畑587町、商業50戸、工業30戸、牛694頭、馬1,064頭となっています。田、牛、馬については、都城市域19村のうち、第一位を占めています。

明治21年 庄内（安永村）の田・畑： 田364町、畑722町

明治20年頃から33年6月 前田用水路建設

坂元源兵衛が、明治20年頃、関之尾の開田のため、関之尾の滝の上流から取水するため隧道工事に着手し、4年後にこれを完成しました。次いで千草地区の開田要請を受けたが資金が調達できず、これを前田正名が引き継ぎ、源兵衛・英俊父子は顧問格で参画し、野々美谷原までの前田用水路を完成させました。

三島通り

三島通庸が招いた商家60戸が軒を並べた通りを三島通りと呼んでいます。

ここには染物・大工・指物大工・車大工・茶・木賃宿・鍛冶・蹄鉄・豆腐・下駄・米・たばこ・呉服・肥料・こうじ・博労などの生活必需品の店が並び、店の人々は鶏鳴に起き

夕べに星をいただくまで商いに励み農村と信頼関係を築いて商いの輪を広げ、庄内・西岳・山田・志和池・横市・財部・末吉から人々がやってきて大賑わいであったといえます。

先人たちの中には、高橋家初代吉五郎、持永家初代善吉・太平次兄弟、熊原家初代曾兵衛、東家初代乙吉、大浦家初代六兵衛、大浦家初代利吉、南崎家初代常右衛門など名を知られていますが、通りの誰もが一体となって町の発展を支えたに違いありません。

先見の取り組み

宮田孝之助は、蚕病対策に取り組みこれに成功し、村内にもこれを広めました。また養蚕の有利性を説き、桑畑用地を貸し付け、組合を組織して養蚕教師を雇いました。明治33年には蚕種の製造に着手し、村内の人々にも分与しました。さらに、貯蔵庫を建て、貯桑室、蚕具、消毒室など施設を拡充するなど、常に村の指導的立場で、農家の所得向上に貢献しました。

石垣

庄内の風景を語るとき、霧島や関之尾（滝、甌穴）とともに石門や石垣のある街並みの魅力があります。その景観は、三島通庸が骨組みをつくり、願心寺建立を契機として屋敷や門構えの整備によって現在の風景が出来上がったともいわれます。

庄内の昔を語る会の調べによると、石垣54件、石造建物4件が記録されています。

願心寺の石垣をつくったのは鳥取県出身の徳永長太郎です。長太郎は前田正名に見込まれて明治32年ごろ前田用水路づくりに呼ばれて来ました。用水路の工事が一段落して願心寺の石垣、石堀づくりに着手し、それから持永邸、亀沢邸、水光邸の正門、石垣、石堀、そして南崎邸の倉庫等をつくりました。持永邸の石垣の石碑には明治44年5月起工、明治45年2月竣工と刻まれています。

明治の石工として、長太郎のほかに外山伝作、奈良迫伝吉、黒田仁蔵がいます。伝作は通庸の遺徳の碑に碑文を刻んだ人であり、伝吉は通庸が治水工事の石工として鹿児島から連れてきた人です。こうした人達が庄内に新しい技術、産業のひとつをもたらしたのです。長太郎は、早田泰蔵、坂元進、鶴村登などの石工を育てました。

石垣の石材は、関之尾の滝の南側の荒谷から切り出した灰石（火山から放出された火山灰等が堆積し固まった暗灰色の岩体）です。灰石は、養蚕室のいりり、桑小屋の石堀、畜舎や堆肥小屋にも利用されました。

大正時代

時代背景

第一次世界大戦が起これ、日本は、中国に対して山東半島や満洲、内モンゴルでの日本の権益を認めさせるといった 21 か条の要求を出し、これを認めさせ、中国では反対運動が起きました。日本は、大戦の影響を受けず、軍需産業や造船業や鉄鋼業が好景気になり、重化学工業が発達しました。

ロシア革命が起これ、連合国は、周辺国に広がることをおそれ、革命反対派に協力するため、シベリアに出兵し、日本も出兵しました。

好景気にともない、物価が上昇し、米の買占めも起きたため、全国で米の安売りをもとめる暴動が起き、これを米騒動といいます。

明治以来の藩閥政治を批判し、政党による政治を主張する護憲運動が政党から主張され、立憲政友会の尾崎行雄や、立憲国民党の犬養毅などが護憲運動の中心になりました。護憲運動などにより、民衆の意見を政治に反映すべきだという考えが強まり、こうした自由主義、民主主義的な社会の風潮のことを大正デモクラシーといいます。

普通選挙制が成立し、満 25 才以上のすべての男子に選挙権が与えられ、納税額は、選挙権には関係なくなりました。しかし、女子には選挙権はなく、このため女性の地位の向上や、女子の選挙権の獲得を目指す女性解放運動が、平塚らいてうなどにより主張されました。また、被差別部落への部落差別の解消を訴えるための全国水平社が京都で結成されました。

暴力的な革命運動を取り締まる目的で治安維持法が成立し、関東大震災が発生しました。

生活面では、都市ではガス、水道、電気、電灯が普及し、バスや鉄道なども普及しました。東京では地下鉄が浅草・銀座などに開通しました。都市などでは、会社勤めをするサラリーマンがあらわれ、ラジオ放送も始まりました。映画やレコードも娯楽として流行し始めました。食事では、パンやカレーライス、オムレツ、コロッケなどの洋食が普及しました。都会にはデパートなどもできました。女学校の制服に洋服が採り入れられ、洋服が女性にも普及しはじめました。

義務教育はほぼ完全に普及し、さらに中等教育、高等教育が普及し初め、教育の普及によって、文字を読める人が大幅に増え、雑誌や新聞を読む人が増えました。

行政

大正 3 年 庄内川（神田川原）の堤防建設

大正 13 年 町制施行により、庄内村から庄内町となりました。

※面積： 約 28 平方キロメートル

※世帯数： 1,500 戸

※人口： 9,200 人

学校

大正元年 庄内小学校の東側の埋立工事が、前田用水路を利用した水流し工法により城山の道路部分を削って行われました。

大正8年 庄内小学校が火災に遭い全焼

大正10年 宮田孝之助が乙房小学校に校舎1棟を寄贈

小学校の生活

紺の着物に下駄ばきで入学。普段は、冬でも裸足のまま教科書と石盤を風呂敷にくるんで登校。先生は威厳があり、いたずらをすると、運動場を回らせたり、冬は霜柱の上に立たせたりしました。学校も遊びも裸足だったので、冬の足洗い鉢には水が張っていて、それを割ってから足を洗うのは大変でした。春と秋には回虫駆除のため海人草を煎じたのを飲まされました。女の子は虱駆除のため、頭に白い粉を振りかけられました。遠足は谷頭駅まで歩いて行き、汽車の見物でした。(庄内8号鶴島善市)

産業

天神馬場には長倉製糸工場や来住製糸工場など4軒の製紙工場がありました。



天神馬場長倉製糸工場（大正の初め頃）

三島通りの賑わい

庄内の町はお寺のお陰で賑わい発展したと思います。寺の行事の度に、たくさんの門徒の人々が泊りがけでお参りし、通りには露店も出て大賑わいでした。12月の報恩講は、5日間続き、お斎をいただく人々の長い行列ができ、春秋の彼岸会、花まつりには、商店は戸板を出して商品を並べ、露店も並んだので、通りが狭くなるほどでした。また八坂神社のオギオン祭りは、ヤマが出て、踊りなどの出し物があり、華やかで賑やかな活気にあふれていました。(庄内6号持永テル、宇野ユキエ)



願心寺山門落成法要行列（三島通り）

交通

大正2年 吉都線開通

大正末期 スズキ自動車商会が設立され、フォードやシボレーを使用して庄内都城間、庄内霧島間、庄内谷頭間の定期運行やハイヤー業務が始まりました。



鈴木自動車商会

昭和時代

時代背景

1929年に、アメリカで株価が大きく下がったことをきっかけに世界的な不景気になりました。日本では、これ以前から第一次世界大戦景気の終わりによる不景気に加え関東大震災の影響も大きく、銀行の倒産や休業があいつぎ、取り付けさわぎも起こって、金融恐慌に陥っていたので、さらに深刻でした。

生糸などの輸出が振るわなくなり会社の倒産が増え、農業では養蚕業が衰退し、米価も下がり、凶作も重なり、国全体が混乱していました。また国民の生活が苦しくなってきたため、労働争議や小作争議が、はげしさを増していきました。

世界的不況を乗り切るため、フランスやイギリスは本国と植民地の間だけで自給自足するといったブロック経済政策を取り、アメリカは公共事業を起こし、経済を活性化させるニューディール政策を取り、ドイツは公共事業を起こして失業者を減らし、再軍備にも取り組み軍需産業を興し景気の回復を図るとともに、ドイツ民族の優秀さを強調し、ユダヤ人を迫害し、また共産主義者を敵視しました。

一方、ソビエト連邦は、経済が共産主義であり、欧米型の資本主義ではなかったので、あまり世界恐慌の影響を受けなかったとされ、世界恐慌に苦しむ各国では、ソビエトの

ように経済における統制をしようとする意見が強まっていきました。そして、経済だけでなく、政治全体においても統制を強めようとする全体主義の意見が、日本でも軍部などを中心に強まっていったのです。

その結果、日本は、強権的な政策や軍備拡張的な政策、対外侵略的な政策に向かい、太平洋戦争へと突き進んでいきました。



1945年8月15日、日本はポツダム宣言を受け入れ、310万人もの犠牲者を出し、国土は焦土と化した悲惨な戦争が終わりました。太平洋諸国に与えた苦しみは計り知れません。その敗戦の中から、国民主権と基本的人権の尊重、戦争放棄などを規定した憲法を制定し、民主主義の社会が始まりました。

第二次世界大戦後、世界は共産主義陣営と自由主義陣営に分かれはしましたが、国際連合を中心に国際協調を図りながら、平和に努めていきました。日本もサンフランシスコ講

和条約を経て国際連合へ加盟し世界の仲間入りを果たして、平和主義の下、復興へ邁進していきました。

戦後、朝鮮戦争特需により復興が加速し、1954年（昭和29年）～1973年（昭和48年）は高度経済成長期といわれ、これは、エネルギーは石炭から石油に代わり、安価な石油が得られたことや、高い教育水準による良質な労働力、高い技術力、消費意欲の拡大、貯蓄率の高さ、円安（1ドル360円）、所得倍増計画などが要因となったものです。東京オリンピックや大阪万博の開催、東海道新幹線や東名高速道路といった大都市間的高速交通網の整備が進み、家庭ではテレビ・洗濯機・冷蔵庫が三種の神器となり豊かさの象徴でもありました。一方で環境破壊や公害病、ごみ公害が問題になり、また過密と過疎の問題が生じ、公害対策や列島改造論が重要な政策となりました。1973年中東戦争により原油価格が高騰というオイルショックを機に経済は安定成長へと向かいました。1980年以降は少子化へと向かい、1980年代後半からは経済のバブル期を迎えました。

行政

昭和3年 関之尾の滝と甌穴群が国の天然記念物に指定を受ける。

昭和10年 庁舎をお軍神の南に移転新築



旧荘内町役場（昭和10年新築移転、昭和40年都城市との合併まで使用）

昭和20年9月 大型台風が襲来

※家屋が倒壊し、堤防が決壊し、山腹が崩壊し、田圃が流失埋没するなど被害額は数千万円に及びました。

昭和26年 町営住宅25棟新築

昭和27年 国鉄日向庄内駅新設

昭和28年 町立庄内病院新築落成

昭和31年7月15日 町村合併促進法に基づき、西岳村と合併し、荘内町が発足

※面積 130.76平方キロメートル

※世帯数 3,638 戸 (庄内 2,241 戸、西岳 1,397 戸)

※人口 19,269 人 (庄内 11,840 人、西岳 7,429 人)

※合併後は、町道の拡張整備に力を注ぎ、二級国道、県道の拡張整備、舗装も進められました。また、小中学校校舎、屋内体操場等の整備充実や、集落ごとの簡易水道事業、広域簡易水道事業、月の原・今屋原・乙房地区の土地区画整理事業も実施されました。

昭和 33 年 関之尾の滝と甌穴群が県立母智丘・関之尾自然公園に指定

昭和 36 年 都城市の一部を編入 (月の原土地区画整理事業に伴い)

※面積 130.89 平方キロメートル

昭和 40 年 4 月 1 日 都城市に編入合併

※合併時の庄内町の世帯数 4,043 戸

※ 人口 16,812 人

昭和 47 年 庄内地区体育館完成

昭和 48 年 市立庄内病院新築完成

昭和 49 年 庄内地区公民館完成

※以後、地域における青年団、婦人会、壮年会、高齢者クラブ、自治公民館、PTA、民生児童委員、文化団体等の活動の拠点であり、まちづくりの拠点でもあります。

昭和 51 年 庄内市民広場完成

昭和 55 年 庄内地区市民広場ナイター施設完成



昭和 40 年頃の三島通り交差点、信号はまだない

学校

昭和 10 年 庄内小学校徳永どんの池とその北側を埋め立て、運動場を建設

※同時に町役場や信用組合を下の運動場跡地に移転し、その跡地に二階建校舎と講堂(県下一といわれた。)を建設

昭和 22 年 庄内小学校校舎新築

昭和 24 年 庄内中学校校舎増築

庄内小学校校舎新築

昭和25年 庄内小学校菓子野分校新築

昭和26年 菓子野小学校開設

昭和38年 庄内中学校の卒業生最多 334人（男150人、女184人）

※昭和22年から昭和24年ごろの第一次ベビーブームに生まれた人々は、団塊の世代といわれています。都城西高校もその対策で設立されました。

昭和43年 庄内中学校プール落成

昭和44年 菓子野小学校プール落成

昭和46年 庄内小学校プール落成

庄内中学校設立のころ

敗戦直後の教育制度改革により中学校が設置され、私は1年生に入学しました。校舎は、旧青年学校の校舎が少々あり、不足分はバラックを建てたり馬小屋の二階を使用しました。バラックは、校舎とか教室とかいえる代物ではなく、床はなく、コンクリートも敷石も敷かれていない土間の教室でした。壁は丸太に板を打ち付けたもので、ガラス窓は明りとりのための板の窓を棒で支えて開けるようになっていました。このため、暑さ寒さは厳しく、雨の日は雨漏り、窓からは風雨の吹込み、土間に水たまりという状況でした。机・椅子は、青年学校跡の教室でも無かったため当分の間は床にあぐらをかいて授業を受けました。バラック教室では、机も椅子も丸太を土間に打ち込み、その上に板を打ち付けたものでした。教員を揃えるのは大変だったと思われませんが、特に英語の教員は開校後も相当の期間不在のままでした。物不足の中、鉛筆、消しゴム、ノート、用紙などは徹底して儉約しました。弁当は日の丸弁当か握りめしがあればよい方でした。着るものはバラバラで、かろうじてつぎはぎしたもの、汚れた古着で間に合わせるとか、夏には肌着一枚だけだったり、靴はなく、下駄も普段は使えず、年中裸足でした。

当時は、社会のインフラも貧弱で、大変不便でしたが、お年寄り、若者、子供それぞれ多くの方が暮らしており、地域における諸活動や季節の諸行事、田植え、稲刈りなどの諸作業が協調、共助、連帯という形で行われており、また、向こう三軒両隣をはじめ近隣の人々との付き合いは濃く、まさにきちんとまとまった地域社会が形成され、機能し、貧しく不便の中でも人々の絆があり、時には賑やかで、そして心豊か、自然豊かな暮らしがあったと思います。

振り返ると、このような中で過ごしたことは、自分にとって大きな糧になっていると思っています。

（庄内第17号持永克民氏の文章より抜粋）

文化

昭和40年 庄内今屋古墳発見

昭和47年 熊襲踊りが県指定文化財に

昭和49年 庄内地区ソフトボール協会設立

庄内地区バレーボール協会設立

庄内地区体育団体連絡協議会設立

昭和57年 菓子野古墳発掘調査



八坂神社祇園祭りの山車、昭和26年まだ馬が引いている

産業

昭和10年 鎌田巖がマオラン工場を創設

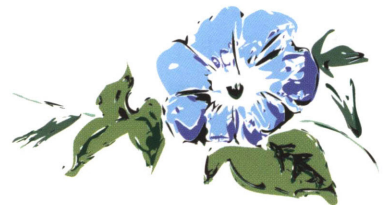
※マオラン：常緑の多年草で、その繊維を、荷馬車の力綱、井戸綱、牛馬手綱、荷造り用の細引きなどに加工して活用されました。

昭和46年 関之尾つり橋完成

昭和50年 市郡内の農協が合併し、都城農協が発足

昭和56年 関之尾緑の村観光農園オープン

昭和57年 関之尾つり橋改修工事完了



交通

昭和2年 女学校通学専用バス運行



※大型の木製車体でフォード製の車。20人掛け位の腰掛と吊り革があり、牧ノ原の坂は皆で押し上げなければならなかった。「箱バス」と呼ばれた。

戦争

昭和16年 太平洋戦争開戦

昭和20年8月6日 アメリカ軍機による庄内空襲

※庄内小学校の校舎・講堂、住宅72戸が被災

昭和20年8月15日 太平洋戦争終戦 出征者多数、戦死者566人

庄内の歴史の章の執筆にあたり以下を参照させていただきました。

都城市史 通史編 中世・近世

都城市史 史料編 近世1

山本博文著「島津義弘の賭け」

三島通庸公による庄内のまちづくり

明治維新

1868年、薩・長・土・肥を中心とする勢力により徳川幕府が倒され、代わって明治新政府が設立され、時代は、江戸から明治へと変わりました。これを明治維新といいます。それまで徳川幕府の下、大名が地方を治めていたのですが、明治になると、将軍も大名も武士も廃止され、西洋文明を取り入れて天皇を中心とした立憲君主制の国家づくりが始まりました。

明治2年、各大名は天皇に版籍（領地と領民）を返還しましたが、明治新政府ができて、すぐに全国を統治することはできなかったので、当面、藩を地方自治の機関として位置づけ、職制を統一して運営を藩主に任せました。鹿児島藩では、西郷隆盛が参政となり、治政所が設けられ、軍務、会計、糾明、観察の4局にそれぞれ総裁と奉行が置かれました。そして鹿児島藩内の113の外城に地頭が任命され、中でも最大規模の都城の地頭には、会計・民事奉行の三島通庸公が抜擢されたのです。

※都城は、鹿児島藩内の外城であり、都城島津氏の私領（約4万石）でありました。

都城地頭に赴任

通庸公は、明治2年9月、34歳で、都城の地頭（地域行政の長）に赴任してきました。しかし、都城では、地頭に元領主の都城島津氏26代元丸（11歳）を推薦する嘆願や、地頭役宅の門標が切りつけられるなど、激しい反対がありました。

そこで通庸公は、役所を安永外城の地頭仮屋跡に定め、都城を上荘内郷、下荘内郷、梶山郷に分割するとともに、検地を実施しました。検地は、藩の布達に先立って着手され、都城士民に田畑、屋敷がほぼ均一に分配（各戸に田2反2畝、畑3反1畝25歩、屋敷1反2畝）されました。113外城のうち検地が完了したのは6カ所に過ぎず、通庸公の高い行政力を示すものでした。

明治3年3月には、下荘内郷の地頭は前田新之丞となり、通庸公は、上荘内郷（現在の庄内を含む。）と梶山郷（現在の三股町の一部）において新しい時代に備えた画期的な町づくりに精力的に取り組むこととなります。



上荘内郷における治政・・・庄内のまちづくり

上荘内郷では、現在の町区・東区・西区（一部）を範囲とする市街地開発、士族や商人の移民策、都城や志和池に通ずる幹線道路の整備、庄内川の堤防築造、学校建設、茶・桑の奨励、兵制の整備、母智丘神社等の建立による敬神の涵養など、僅か2年足らずの間に近代化に向けた町づくりを行ったのです。

それまでの庄内は、都城島津氏の私領であり、五口六外城の中の安永外城として地頭のもと所三役（囃・組頭・横目）等が治めていました。人々の居住の状況は、城下町や集落を形成していたというよりも、城山の麓には地頭仮屋（役所）が置かれ、重役の侍が住み、領内には門を単位に百姓家があり、武士層も分散して住んでいて、現在の小学校周辺には60戸程度の人家があったようです。こうした景観が通庸公の政策で一変したのです。

まず、木を伐り、地を開き、谷や湿地を埋め、道路を縦横に整備し、移民を受け入れるための市街地を建設しました。

移住者を招くにあたっては、田・畑、宅地、住居、厩、湯殿、店舗などの無償提供の優遇策により、希望者が殺到し、商家60戸と士族260戸が移住してきました。移民資格は身元確実、家族同伴が条件で、堅実善良で良く土着の人と和合結集し、協力一致の精神は伝統となりました。

また、交通基盤を重視し、庄内都城間に幅員7.2メートルの道路（現在の県道霧島公園線）や庄内から野々美谷・志和池へ至る道路を整備しました。また関之尾から乙房までの庄内川の堤防を築きました。鹿児島から三原叢五氏を招き庄内小学校の南に学校を建て、士族の子弟の教育を行いました。通庸公は、敬神の念厚く、母智丘神社をはじめ鹿島神社・豊幡神社を創建するとともに、母智丘神社の参道沿いに茶や桑を植えて奨励に努めました。兵制は屯田の制により常備隊4小隊を編成しました。

梶山郷における治政・・・三股のまちづくり

梶山郷（のちに梶山と勝岡と合併して下三俣郷となる。）においても、郷の中心として山王原の原野を開いて士族70戸が招致し屋敷町をつくりました。上荘内郷と同様に鹿児島から教師を招いて学校を建て教育を行い、畜産を振興し、常備隊を置き、敬神思想を涵養するため稲荷神社を整備しました。

地頭任期の終わり

明治4年7月、明治政府はこれまでの藩を廃止し新しく府・県を置いて中央集権国家体制を築くため廃藩置県を実施し、庄内は鹿児島県に組み込まれました。通庸の地頭としての役割が終わりますが、その活躍は西郷隆盛や大久保利通の知るところとなり、大久保の熱心な誘いを受けて、11月、東京府に務めることになりました。

それからの通庸公

東京府では、3年かかるといわれた都下の地積測量を30日でやり遂げ、大火の後の銀座の煉瓦街づくりに政府と一緒に取り組む、また、参事として知事を支え、なくてはならない存在でした。それからは、教部省教部大丞、酒田県令、鶴岡県令、山形県令、福島県令、栃木県令、内務省土木局長、警視總監、子爵として休むことなく激務を務め、53歳で亡くなりました。

酒田県令への就任については、西郷隆盛を慕う庄内士族の西郷への同調（反乱）を恐れた大久保利通の要請を受けたものであったといわれています。

県令としては、県庁を中心に西洋建築のような目を見張る建物や街並みを造り、教育や医療、産業を振興し、そして東北の各県と首都東京を結ぶ幹線主要道路を建設するなど、明治の地方における近代化を先頭に立って引っ張っていったスーパーマンでした。

一方、地方の公共事業は政府の補助は微々たるもので、受益者負担として、住民の負担が金銭的にも労力としても求められ、これが過酷であるということで、鬼県令という厳しい非難もありました。また、自由民権運動と政府との間に立って、政府を支えるうえで、民権の弾圧者との批判もあります。しかし、近代国家の立ち上がり期に、すべては国のためと一筋に貫いた偉男子としてその輝きは時代を超えて光り続けるものです。

徳富蘇峰は、通庸を評して「6尺の身をもって、よく明治政府の長城たり」と、また伊藤博文は、「三島を中央政府に引き戻すのが遅すぎた。それにあの若さで死んで残念だ。もし生きていたら、随分と偉いことをして呉れたらうに。」といったとか。



石版画 山形県庁ノ図

作者 高橋 由一 制作年 明治18年(1885)
寸法 17.6 × 23.6cm 所蔵者 那須野が原博物館

遺徳の碑

庄内では、通庸公の町づくりを礎として、以後、教育の町として人材を輩出し、商・工・農による経済も活況を呈し、優良村として大いに発展をみただけであります。明治42年、通庸公の功績を後世に伝えようとお軍神に遺徳之碑が建立されました。大正14年には庄内小学校の校歌に通庸公の功が謳われています。

また三股町では、大正10年、遺徳を称える三股開拓之碑が建立され、三股小学校には胸像が建てられています。

なお、三島農場があった栃木県那須塩原市には地域の恩人として三島神社が建立されて今も大事に祀られています。

人となり

通庸公は、天保6年（1835）6月1日、明治維新の英傑を輩出した鹿児島市上之園に、薩摩藩士・三島通純の長男として生まれ、容貌魁偉、豪邁果敢、幼少より経世の志を抱く人と評され、加えて豪放磊落で、立身出世にこだわらず、人情味のある、スケールのずば抜けた人でした。

幼い頃から、鼓の稽古に打ち込む姿は近隣の評判で、武術においては優れた示現流の使い手であり、文においては儒学、兵学、史学などを修め、藩校「造士館」の句読師（先生）を勤めました。長じては大久保利通を中心とした精忠組に与し、寺田屋事件（尊王攘夷の挙兵計画）に連座して謹慎となりましたが、翌年、謹慎を解かれ、禁門の変では西郷隆盛の指揮下で小荷田方を務め、戊辰戦争においては人馬奉行を務めて活躍。明治においては敬神と開明思想をもって国家建設に邁進し近代化の道を切り開いた人でした。



太平洋戦争の記憶

庄内小学校正門横のお軍神に、日清、日露、太平洋戦争の記念碑があります。庄内では、日清戦争に88名が出征し、日露戦争には189名が出征し17名が戦死。太平洋戦争では566名が戦死し、昭和20年8月6日のアメリカ軍の空襲により庄内小学校の講堂、校舎そして72戸の家屋等が被災しました。

戦争は、かけがえのない人の命を奪い、町を破壊し、生活や人生を狂わせ、人の心に深い悲しみと苦しみそして消えることのない恨みや憎しみを残す最大の不幸であります。

太平洋戦争が終わって70年以上が過ぎ、戦争体験の有る人は年々少なくなっています。戦争に行った人は必ず言います。戦争を経験した人もまた言います。「戦争はしてはいけない」と。このことは、莫大な犠牲を払った歴史の特別な教訓であり、遺産なのです。未来永劫その反省を忘れてはならないのです。

私達は、今、憲法で戦争を放棄し、平和と自由を得て、豊かさを追い求めています。このことがかつての戦争時代に比べてどんなに幸せであるか、戦争を体験した人達は身に沁みて分かっています。未来にとって、その貴重な歴史記憶を、戦争を知らない世代にしっかりと伝えていくことこそが平和を守ることにつながると信じて、庄内の人々にペンをとっていただいた記録があります。

その中から、8人の方々の戦争体験を次に紹介します。

「兄の決別の書」

清水 省三

兄松山実方（陸軍大尉）が昭和18年8月、征途に就く直前に家長の兄萬流宛に訣別の手紙を送っています。当時の若者たちがどんな心情で戦場に臨んだかを計り知ることができるのではないのでしょうか。

「前略・・・扱て小生の出陣も思ひの外早く今月の10日頃出発の予定で出陣準備も出来て待機の姿勢にあります。目的地はラバウルで現代戦の悲惨なる様相、壮烈なる戦闘相剋を実際に体験し得ると思えます。昨日も今日も溺死から逃れて来た将校の話の聞かされませんが想像以上の様です。既に一身を捧げた身、今更未練もなく、極めて驚く可き平静なる心で出発を待っています。今度は生きて帰れぬでせう。後は宜敷く御願致します。戦死の知らせがあったら70余名の部下を従えて陣頭に散花した小生の姿を思ひ浮べて下さい。既に出陣に臨んでも何もいふことはありません。日頃乏しい乍らも養って来た心構を以て一家の名を汚さぬ様御国のために充分なる働をして来る覚悟で居ります。・・・面倒ばかり掛けて申訳ありませんでしたが、今度は名誉回復のため奮戦する積りです。・・・先ずは簡略乍ら出陣に臨み急ぎしたためました。万歳」

※実方氏は、昭和19年12月1日ニューギニア島ワットギーにて戦死されました。

※ニューギニアでは、第18軍が22ヶ月にわたり、米豪軍と戦い、1,500キロメートル

を踏破して疫病と飢餓に倒れながら苦闘した戦線であり、約13万人が戦病死したといわれます。

「特攻隊」

平田 光盛

昭和20年1月18日、「メンカイニコイ、ミツハル」の電報が佐世保海軍航空隊の兄から届きました。急ぎ汽車の切符を買いに走り、もう生きて会えないのではないかと一心に買い求めてやっとのことで手に入れた2枚の切符でした。母と私は夜8時30分の汽車に乗りました。ようやく佐世保に着いて、鶏肉の煮しめを囲んで親子三人水入らずでしみりと語り合いました。

「戦争は今勝つか負けるかの分かれ道だ、俺達航空隊が体当たりで敵艦を一隻でも多く沈めることが日本の勝利につながるのだ。」

「光春もぐらしこっね、こん世に生まれて、おなごも知らじ、け死んとかね。」

「母さんな 何を言うとな、この非常時にそげなこつ言うと笑わるっど。」

兄の顔は笑っていたが、目には涙が光っていました。

「光盛よ おれは先に靖国神社に行っちゃっかい、今度逢うときは あそこじゃろう。」

「おまいも 母さんぬ助けてがんばっくりね。」

兄は両手をつかんで励ましてくれました。

「うん。」

私はうなずきました。

短い夜を語りあかした親子三人に朝の光が訪れました。翌日、佐世保の町を見物し、航空隊の営門で最後の別れでした。母は、声もなくなただただ泣くばかりでした。

※光春氏は、まもなく特攻隊員として出撃し、東シナ海において壮烈な戦死を遂げられました。

「勤労働員学徒報国隊」

清水 たつ子

昭和16年4月、県立都城高等女学校に入学。12月8日大東亜戦争が勃発し、校長の訓話はいつも「鬼畜米英撃ちてしやまん」でした。2年生になると、英語の授業がなくなり、農繁期には田植、稲刈、芋掘に駆り出されました。4年生になると、学徒報国隊として川崎航空機製作所に行くことになり、練成作業として2ヶ月間宮崎市の郡是製糸工場でハンマー、ヤスリの基本作業と竹槍訓練があり、そのあとに授業といった日課でした。この2ヶ月間は、母が面会に来て也會われず、小包も受け取れず、食事は孟宗竹の食器から芋の団子に米粒がついたような御飯と塩汁といった粗末なものでした。

川崎航空機製作所では、戦闘機飛燕のエンジンの冷却器覆い部分を作る部署で、ジュラルミンの鋳をハンマーで打っていました。空襲警報が鳴ると早水の競馬場に掘られた防空壕に蟻の行列のようになだれ込みました。19年の卒業も見送られ、学徒動員が継続。20年5月8日いつものように谷頭駅から汽車に乗り都城駅で降り、大勢の従業員と歩いてい

た時、グラマンの奇襲攻撃を受けましたが、何とか防空壕に逃れて助かりました。このとき寮にいた小林中学の3年生10名が亡くなりました。

「庄内空襲」

久保田 武美

丁度昼ごろ、空襲のサイレンが鳴り響き、都城方面を見ると盛んに空襲を受けていました。そのうち横市方向より真っすぐこちらに突っ込んでくる飛行機があつて、上空で何かをばらまいたようでした。それは液体のようでもあり、二回三回旋回しながら機銃掃射を浴びせてきました。それは一瞬の出来事で、やがて静かになり、黒煙を噴き上げたのは小学校の講堂でした。火の手は小学校から西区方面に広がっていきました。

私は、学校下の妻の実家に夢中で走り、着いた時には屋根は燃え上がっていました。家に飛び込むと、米びつを探し、タンスの引き出しを外に放り出し、モロブタを持ち出しました。防空壕に避難していた義妹が負傷していたのでようやく自宅に運び、軍医の応急手当で命はとりとめました。負傷者は、義妹と山内さんの爺さんの二人。義妹は体内に残っていた銃弾を20年後に福岡の病院で摘出しました。

「庄内空襲」

中井 あさ子

空襲を受けて、庄内川の方へワァッと逃げ出す人の波。炎と爆音におびえて、私の家の前を庄内全体の人が右往左往して逃げ出すような状態でした。私と妹は床の間にあった米俵二俵を持ち出すのに必死でした。外にはガソリンの臭いが充満し、黒い煙、赤い炎、地獄図絵の様でこの世の終わりかと思いました。都城の安永旅館から逃げてきた祖父母たちは、艦載機の爆撃であっちこっちの防空壕に入りながら一日かけてやっと庄内にたどり着いたのです。

「ソ連軍収容所・中共軍そして祖国へ」

黒木 聖

私は、朝鮮で生まれ「君に忠、親に孝」と教えられました。昭和19年9月10日召集令状が届き、国の為一命を捧げる日がついに来て、喜びを抑えることができないほど嬉しかった。

20年3月1日幹部候補生を志願し合格。上等兵、兵長、伍長と二十年三月一日幹部候補生を志願し合格。昇進し、長靴を履き帯刀するようになりました。6月21日幹部候補生教育隊(砲兵隊)に入り、7月1日軍曹に昇進。訓練は厳しくても夢があり、楽しい日々でした。8月15日、玉音放送により思いもよらぬ敗戦のショックで、自決の機会をさがしましたが、上官の見張りが厳しく、果たせませんでした。

昭和20年8月22日ソ連軍による武装解除を受けました。その夜、村人が大集団で銃、鋏、鎌などをもって教育隊を襲って来ました。私たちは武装解除にもかかわらず床下に隠し持っていた日本刀を取り出し応戦。私は銃剣で足を刺され、鎌で左手甲を負傷し入院する羽目となりました。この怨みと憎しみはおそらく永遠に消え去らないでしょう。翌日、

ソ連軍が戦車を先頭に進駐してきました。教育隊長は抜刀して教育隊内への進入を阻もうとしましたが、戦車に轢かれて壮烈な最期を遂げました。

8月24日三合里収容所に移されました。ソ連兵には、手首に刺青をした者や少年兵に混じって、婦人将校がたくさんいました。捕虜となった婦女子は暴力を恐れて丸坊主になり、兵服を纏い、顔に土や鍋墨を塗り、男を装い、男性と起居を共にしました。食事は、飯盒の蓋一杯の高梁が一日分で野菜も調味料もなく、みるみる栄養失調になっていきました。下着は替えがないので虱がぞろぞろと血を吸い、夜には南京虫の襲撃で首と手首が刺されて赤く腫れあがりました。薪取りで収容所の外に出たときは、仲間と組んで、餅や飴を売っていた朝鮮人を脅してそれを奪い、持ち帰って病人や婦女子へ分け与えました。モスクワへ向かう貨車に鉄道線路を積み込む使役に出されたこともありました。

10月14日満洲の延吉収容所に転送されました。五重張りの鉄条網に囲まれ、一層警戒が厳重でした。食糧は高粱のみで、顔は骨ばかりか青膨れ、肋骨は洗濯板の様にへこんで井が入るくらい穴が開いていました。尻の皮は10センチくらい伸びました。足は線香と同じでした。このままでは死ぬと思い、馬小屋から岩塩と大豆粕を盗み取り、草と高粱に混ぜて御飯にしました。満洲の冬は寒く、零下30度の時もありました。

21年1月吉林収容所に転送。ここでは毎日のように20人から30人の死者が出ました。4月には収容所の管理がソ連軍から中共軍に移管され、若い元気のある者は強制的に中共軍の兵士となりました。軍事訓練を受けて国府軍との戦場に連れて行かれました。実弾を人間に向けて発射したのも手榴弾を投げたのもこの時が初めてでした。私は無我夢中で銃剣術の技で一人を刺し殺しました。夜になって歩哨に立たされたのを機会に逃走しました。地形の分からない広野をただ一人、死の孤独感と不安に恐怖と緊張が続きました。生きるためには精神力だと自分に言い聞かせ、苔の水を吸い、松の葉や皮の剥いでその汁を吸い、芋虫、バッタ、トカゲ、カエルなどを食べました。父母の写真も勇気をくれました。突然今度は国府軍の斥候に捕まりました。幸い、中共軍の情報を提供したことで地図をくれ、逃がしてくれました。地図を頼りに八日間かけて敦化の街に着きました。そこで日本人の叔母さんの世話で服をもらい、満人部落に身を寄せクーリ（下男）として働きました。

アメリカの仲介で国府軍と中共軍との一時休戦が実現し、敦化の日本人も内地に引き上げることが決まりました。9月5日敦化を立出。さらば敦化よ満洲よ。体一つで帰っていく引揚者集団は、無気味なまでに静かであるで葬列の様でした。貨車と徒歩そして筏で大河を渡り、コレラの流行を乗り越えて、10月14日筍蘆島からアメリカ船で出航。博多港で復員手続きをしたら宮崎県出身者は二人のみ。その一人である美々津の東さんに誘われて、東さん御一家の心のこもった手厚いもてなしを受け、10月24日初めて見る庄内へたどり着いたのです。

北朝鮮からの帰還

大田 典子

終戦を北朝鮮で迎えました。父は道庁に出勤して行きましたが、兵隊たちに連行されま

した。そしてロシア兵が進入してきました。若い娘さんたちは拉致されるとのうわさで男みたい髪を刈ったと聞いております。学生の動乱が起き銃撃戦があり、姿勢を低くして這いつくばって生活した日々もありました。また、一人で留守番しているとトラックで数人の韓国人が来て、父のものを全部持っていきました。

父が刑務所にいると聞いて、母に連れられて面会に行きました。その時のことは今でも思い出したり書いたり辛くて伝えることはできません。母も私たちが父に取りすがりわずかな時間を泣く泣く別れ、父の温もりを肌で感じながら帰りました。父はチリ紙に自分の金歯と頭髪をくるんで渡しました。それから間もなく、父は銃剣に囲まれ隊列を組んでシベリアへと護送されて行きました。そのとき、私は隊列の中に父を見つけ、母から風呂敷包（中には写真や父の好物、タバコなどが入っていた）をかなぐり取って父に渡しました。その後の父のことは知る由もありません。

父がいなくなって1年が経ち、母は、子供たちを日本に絶対に連れて帰らなければと、漁舟に多額のお金を渡して、私たちを連れて新義州の河口から舟に乗り込み38度線を越えて南朝（韓国）に渡りました。舟は満杯で身動き取れず地獄絵図のようでしたが、その中で赤ちゃんが生まれました。南朝からは大型タンカーで九州に上陸し、都城駅で降りて、着の身着のまま実家に着きました。今の幸せは母が勇気をもって私たちを連れて帰ってくれたおかげです

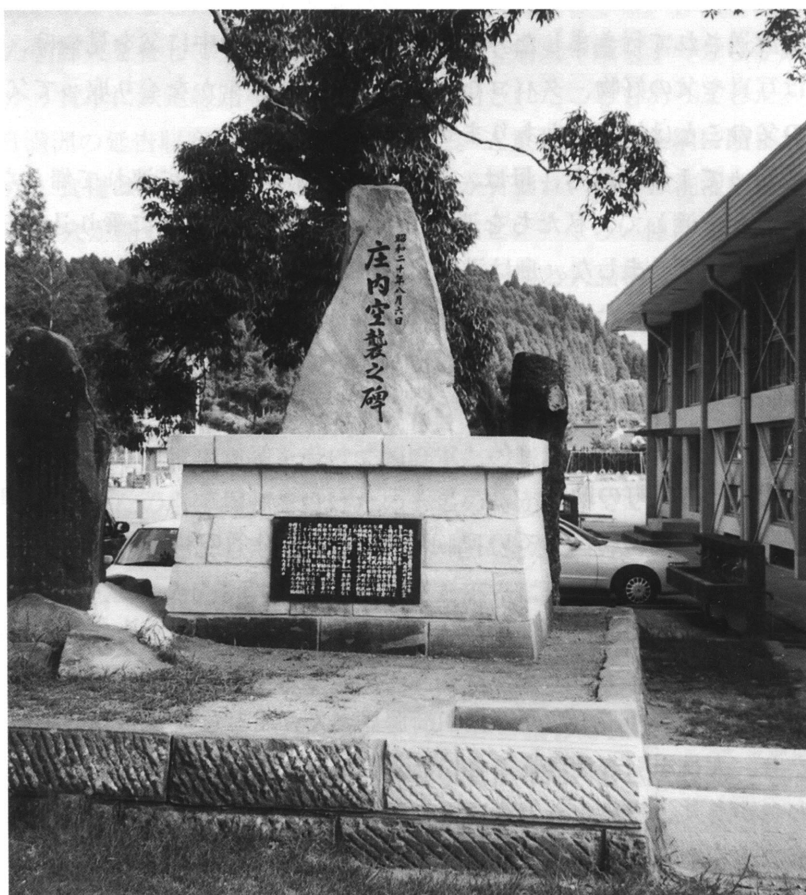
引き揚げで農業そして町の助役

田川 正江

朝鮮で食料関係の公団勤務をしていて、終戦の際、200名の職員家族を日本に帰す任務に就いていました。

朝鮮から無一物で引き揚げてきました。7人の子供たちを守るため、朝早くから夕方遅くまで慣れぬ鋤を振るい、子の手まで借りて、死に物狂いで、一町二反の荒畑の開墾に奮闘。ところが、朝鮮の公団で上司だった田崎藤雄さんが町長に就任され、私に助役をやれという話になり、大役を引き受けることになりました。関之尾の滝周辺を林田バスが買い取るとのうわさがあり、宮銀から100万円の融資を受けて、町有地にしたこと。そして小林さんの貸家の土地を分けてもらい町立病院を建設したことが思い出です。





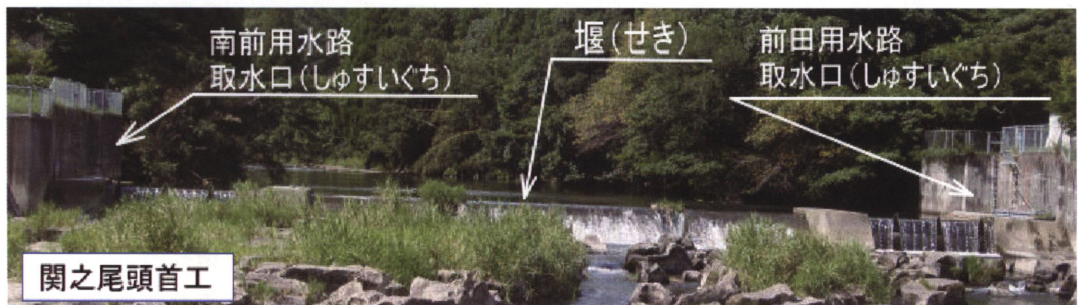
庄内空襲の碑（建立当時）

庄内の三大用水路

はじめに

関之尾町庄内川から水を引いている、前田用水路、南前用水路、北前用水路のことを庄内三大用水路といいます。

その水路を守っているのが、庄内土地改良区（水土里ネット庄内）です。庄内土地改良区は、昭和24年に創立されました。庄内土地改良区は、山田町や庄内町、夏尾町などの約33,802mの用水路を守っています。その用水路が水を引いている田んぼの面積は642haです。



関之尾頭首工（とうしゅこう）

川から水を取るためにつくられた、堰や取水口などを、ひとつにまとめた呼び名を頭首

工といます。

「取水口」

川や沼などから、水用水路に取り入れる施設を取水口といます。

「堰」

田んぼに水を引くために、川をせき止め、川の水の高さを上げる施設のことです。関之尾頭首工の堰は、台風などの大雨で川の水の高さがあがり、洪水になる危険があるときは、自動で堰が倒れて川の水の高さを下げ洪水を防ぎます。

関之尾頭首工は、昔の3箇所の取水口をまとめて、1954年（昭和29年）につくられ、1986年（昭和61年）に古くなった取水口や堰をつくりなおしました。この頭首工を守っているのは、庄内土地改良区です。庄内土地改良区が、頭首工や用水路を守っているのです。皆さんは、毎日美味しいお米が食べられるのです。

前田用水路のはなし

（源兵衛さん：坂元源兵衛／正名さん：前田正名）

昔、関之尾農民は、田んぼがなく大変貧乏でした。関之尾の農民たちは、庄内町の源兵衛さんに、田んぼをつくってくれとお願いしました。そこで坂元源兵衛さんは「どげんかせんといかん」と用水路工事をはじめました。用水路工事をはじめたのは、1887年（明治20年）でした。

工事は、庄内川から硬い岩を掘るむずかしいトンネル工事です。昔は機械がありませんので、鍬と鑿つちのみで掘りました。工事途中にトンネルが壊れたり、大変な工事でトンネルを掘るのに5年間もかかりましたが、1896年（明治29年）用水路と田んぼが完成し、関之尾の農民は大変よろこびました。

源兵衛さんは、工事を始めるとき山田町谷頭まで用水路をつくる計画で、たくさん用水をとるために大きなトンネルを掘りました。そして山田町谷頭まで水を引く工事を続けました。ところがトンネルを掘るのにたくさんの工事費がかかりお金がなくなりました。

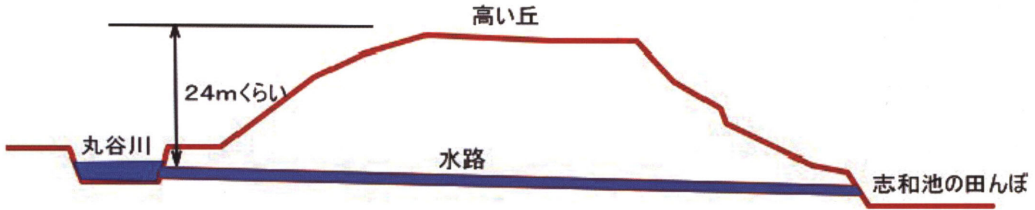
そこで源兵衛さんは、あちこちにお金を貸してくれとお願いしましたが、誰もお金を貸してくれません。1897年（明治30年）に工事ができなくなり、それを聞いた、村や県の偉い人に工事の権利を正名さんに譲るよう何度もお願いされ、仕方なく譲りました。

ところが譲る話しを聞いた、志和池の農民が「上流で水をとられたら、志和池で使う水がたりなくなる」と反対運動がおこり、丸谷川から水を引き、代替りの用水路をつくることにしましたが、丸谷川から志和池に水を引く途中に高い丘があり、工事の邪魔になります。

源兵衛さんは、高い丘を掘ってつくる掘割水路を考えていましたが、正名さんは、東京の技師の考えが正しいと、トンネルを掘ることにしました。源兵衛さんは、シラスのトンネルは、水で壊れるといましたが、正名さんは、源兵衛さんの意見を田舎者の考えだと無視しました。

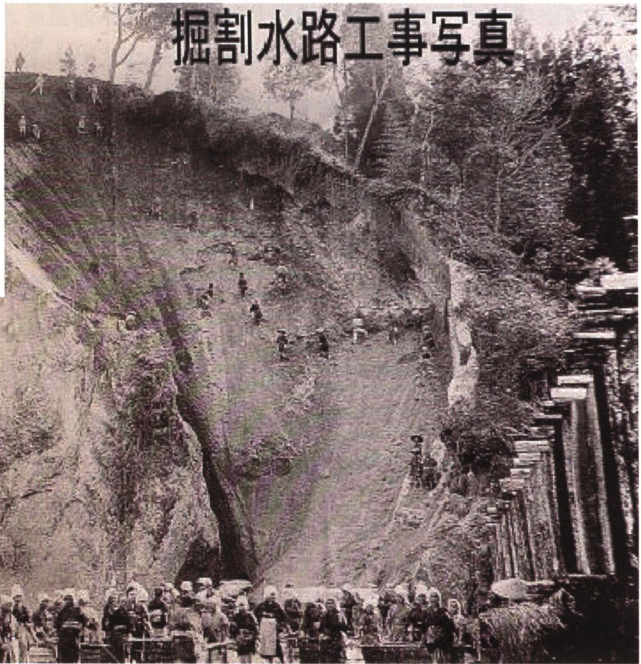
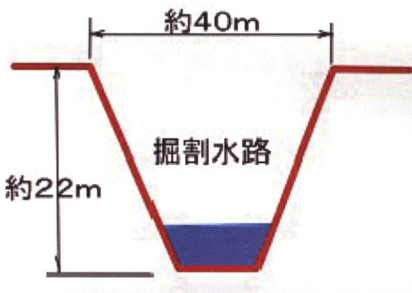
志和池の農民達は、石つくりのトンネルにするとことで賛成しましたが、工事をはじめたところ沢山の水が出て工事ができなくなりました。

そこで掘割水路で工事をすることにしましたが、東京の技師は、工事費9万円、工期3年間で完成すると、正名さんに伝えました。それを聞いた正名さんは、怒り「工事はやめる」といって、東京に帰ってしまいました。



村人は困ってしまいましたが、源兵衛さんが「工事費5,000円、工期5ヶ月で工事は完成できる」といったことを、村の偉い人が聞いていたので、正名さんに何度もお願いし、源兵衛さんが工事をするようになりました。

源兵衛さんは、「水流し工法」で工事をしました。「水流し工法」は薩摩藩に伝わる工事で、掘ったシラスを人間が運ぶ代わりに水で流して運ぶのです。源兵衛さんは約束を守り1900年（明治34年）6月に工事を完成させ、志和池の農民は大変喜びました。



こうして源兵衛さんの力で掘割水路が完成し、前田用水路も水が引けるようになりましたが、東京の技師がつくった、小田川の掛樋（川などにかける用水路の橋のことです。前田用水路の掛樋は木製でした。）が落ちてしまい、水が引けなくなりました。そこで正名さんに修理を頼みましたが「金がないので修理はできない」といわれ、農民達は困ってしまいました。

これを見た源兵衛さんは、「みんなで協力して、水流し工法で堤防をつくろう」といいましたが、お金がありません。

そこで村の偉い人たちが、鹿児島県の正名さんの弟さんから1,200円のお金を借り、1903年（明治35年）に工事がはじまり、1ヶ月で工事は完成しました。それから農民達は安心して米づくりができるようになりました。



源兵衛さんの陶像^{とうぞう}

1931年（昭和6年）ころ、庄内では、水争いがたえず、坂元^{いちじ}一二さんが心配して、みんなが仲良く助け合っているように、会員約200人の「庄内有^{めう}愛会」を結成しました。会長は坂元一二さんになりました。

「庄内親愛会」で、源兵衛さんの恩に感謝して、銅像をつくることになりました。そこで関之尾の石工、黒田甚藏^{くろだじんぞう}さんに相談したところ、金のかかる銅像より、陶像でつくる方が良いと話したので、陶像でつくりました。陶像は小松原^{とうこう}の陶工、朴休丹が焼いたと伝えられています。

1933年（昭和8年）、藁^{わら}に包まれた陶像は、多くの村人に見守られ、地元の青年男女の手で、現地に運ばれ^{こんりゅう}建立されました。除幕式は盛大で、小学生が除幕^{ひも}の紐を引いたそうです。

源兵衛さんの陶像は、東方を向き農民のために生涯を捧げた、開田を優しく微笑み眺めておられます。



南前用水路について

貞享2年(1685)今から約330年前、都城第18代領主島津久理公の命により家老川上久隆がその任にあたり、滝上右岸から取水して滝直上の固い岩盤を急勾配で掘りぬくという大変な難工事でした。貫通するトンネルは延長300m。先人の偉業に驚嘆の他はありません。この工事で数十ヘクタールの水田が開かれました。その後明治19年(1886年)に坂元源兵衛がつくった川崎用水路とつながりました。

なお明治の中頃、前田用水路の取水により水位が下がり本水路への取水量が減少し灌漑に支障を来たしたため、昭和7年、約150mに亘る取水溝の岩盤底を約1メートル掘り下げ石垣を設ける等の工事を行い水量の確保を図りました。また現在の取り入れ口は近代化された頭首工、水門によって管理され水路の長さ7.2Km、庄内川右岸の100haを順調に灌漑しています。

北前用水路について

旧来の用水路は本滝からの落下水を樋で受けて導水していましたが被災する事が多く明治27年(1894年)坂元源兵衛翁の発案で、滝直上左岸の岩盤を掘割り導水し女滝から落下させた水を既存の用水路に導く手法で改良され現在に至っています。庄内中学校下付近まで延長5.1km、庄内川左岸88haを灌漑しています。男滝は水量調節のための滝です。

坂元源兵衛のプロフィール

天保11年(1840)西岳田野で出生 坂元家は島津家行司役小番 牧場経営 水流し工法による開田技術を継承した家柄 西岳の開田数十町歩を都城島津家に献上

1. 明治2年(1869)三島地頭の命に依り庄内に移住 家伝の土木技術で決壊した堤防の修復、田圃の復旧に当たる 常備隊分隊長 通庸の伝令として鹿児島藩庁を往復
2. 明治4年里正兼戸長助拜命
3. 明治7年小田川に水車を設置、精米業を共同経営
4. 明治8年芹川内製鉄所建設 西南役で破壊される
5. 明治10年西南の役では安永隊を引率 都城隊に先駆けて私学校入隊 河野圭一郎隊に編入 植木で負傷治療のため帰還 再応召 高城で降伏
6. 明治13年西南の役帰還者で庄内戦死者の招魂碑建設
7. 明治18年観瀾書院設立、初代館長 志布志から魚の購買ルートの開拓
8. 明治17年川崎ミッターランタンから引水、水流し工法で自家田6町歩を開田
9. 明治22年関之尾地区民の要請で用水路開削に着手、滝上流からトンネルで取水し苦難の末20町歩の開田に成功、引き続き菓子野原まで開削計画するも資金難に陥り上の段取りで頓挫
10. 明治32年南崎常右衛門の仲介で前田正名に権利譲渡 工事には協力するも工法の意見が合わずクビ 明治36年、行き詰まった志和地水路の開削を要請され水流し工法

を駆使して掘割りで完工

11. 一切の公職を退き、小田川水車で余生を送る 大正5年(1916)没 77歳

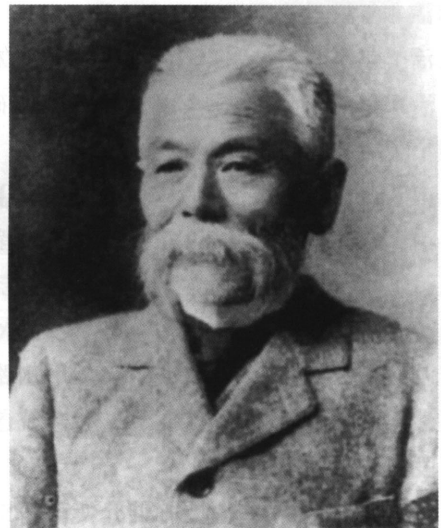
前田正名のプロフィール

嘉永3年(1850)生 旧鹿兒島藩士 明治2年フランス留学8年間 明治12年大蔵省入省 明治14年大久保利通の姪と結婚 明治21年山梨県知事 明治23年(1890)農商務次官退官 元老院議官

1. 貴族院勅撰議員 明治24年全国茶業振興会設立 輸出奨励組織を全国的に作った52会を組織 滞欧中の経験を生かして全国的に一歩園(国有地の払い下げ地)を作り 果樹、蔬菜等を普及 明治27年大日本商工会初代会頭、大日本農会の幹事長 明治29年松方内閣の農商務大臣の要請があったが陸奥宗光と対立があり入閣を断る 明治30年単身渡米関税軽減に成功 全国遊説 農業、産業振興で富国強兵を訴える 明治26年から機関誌「産業」発行 年間千円の資金を投入 38号までを発行 明治30年資金切れで従来の活動を中止して新たな資金づくりを模索 それが起業開田と釧路での製紙事業であった 製紙事業は失敗 阿寒湖所有林は約3,000町歩(現在財団法人で管理)
2. 妻市子は久保利通の妹の息女 利通や松形正義の引き立てがあった 明治31年頃宮崎県の紹介で都城に来る 川南、高木原、繩瀬用水路を計画したが途中放棄、鹿兒島県小根占は成功したが後権利を譲渡した
3. 明治31年 南崎常右衛門の紹介で頓挫中の源兵衛の事業に着目 明治32年権利を譲り受け 32年~37年前田用水路に専念 菓子野、谷頭原に300町歩の開田に成功
4. 明治35年には秋田県から石川理紀之助一行8人を招請、農民の教化に努めた
5. 直情径行短気な性格 大正10年(1921)福岡の病院で死去 71歳 男爵



坂元 源兵衛



前田 正名

庄内の遺跡

都城市教育委員会文化財課 栗山 葉子

はじめに

都城市教育委員会文化財課では、地域の遺産である遺跡と遺跡の出土品を広く市民に活用していただけるよう、平成22年度より、国の補助を受け、「都城市埋蔵文化財保存活用整備事業」を実施しています。事業では、市内の出土品をいろいろな場所で展示する巡回企画展や、出土品を活用した学校での出前授業・体験学習会、市民向けの歴史講演会等を行っています。

「庄内の昔を語る会」より、庄内の遺跡について話をしたいという依頼があり、事業の一環として、平成24年2月24日に、庄内地区公民館にてお話をさせていただきました。今回、その時の内容を文章にして欲しいとの依頼があり、1人でも多くの方に庄内地区の事を知っていただけるのであればと、投稿させていただくことになりました。

庄内地区といえば…

「庄内地区」というと、おそらく都城市でも歴史に対する意識が高い地区ではないでしょうか。それは、都城島津氏の元となる北郷氏が拠点築いた地であり、安永城といった史跡等も数多く残されているため、幼少のころより歴史に囲まれて育った環境のなせる技なのかもしれません。

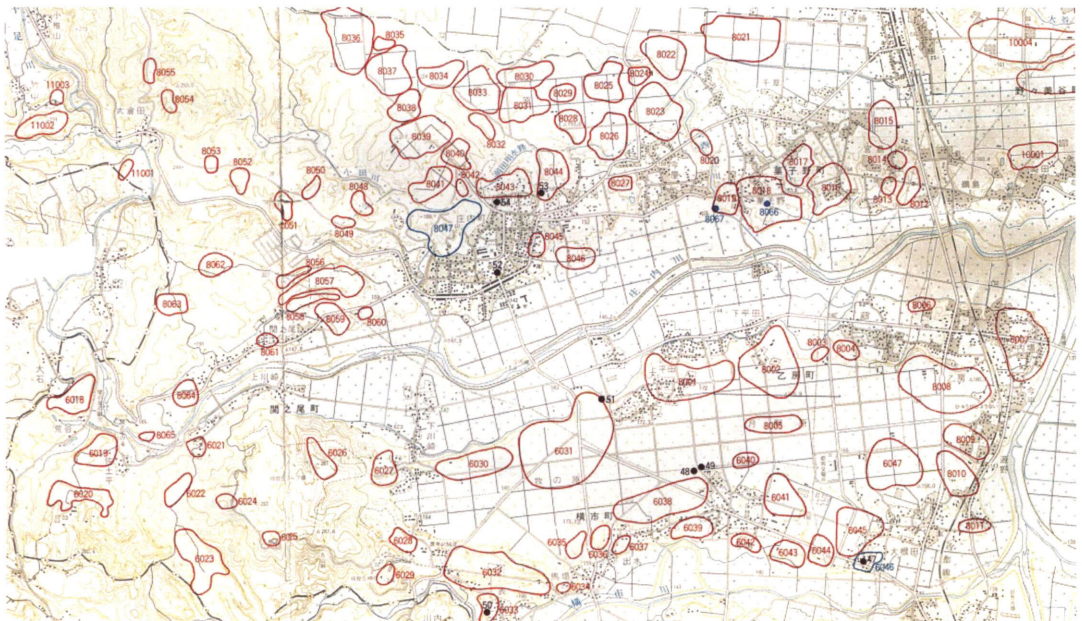


図1は、庄内地区の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）を示した地図です。非常にたくさんの遺跡があることがわかります。特徴的なのは、古墳時代のお墓がたくさんあること、中世山城や寺院があること、江戸時代の地頭仮屋跡があること、かくれ念仏洞があることでしょう。庄内地区には、現在、約八十箇所の埋蔵文化財包蔵地があると考えられています。では、庄内の歴史を発掘調査からすこしだけひも解いてみましょう。

縄文時代の庄内地区

現在、庄内地区には20箇所以上の縄文時代の遺跡があると考えられていて、庄内川の兩岸の台地の端に分布しているようです。これまで、実際に発掘調査が行われているのは2遺跡（伊勢谷第1遺跡、丸山第1遺跡）で、今回は、このうちの伊勢谷第1遺跡について御紹介します。

伊勢谷第1遺跡は、くまそ広場建設に伴い、発掘調査を実施しました（1997・1999・2001年）。調査面積は、1万平方メートルにも及びます。

今から、約7,500年前と、約4,500年前に集落が営まれたことがわかりました。

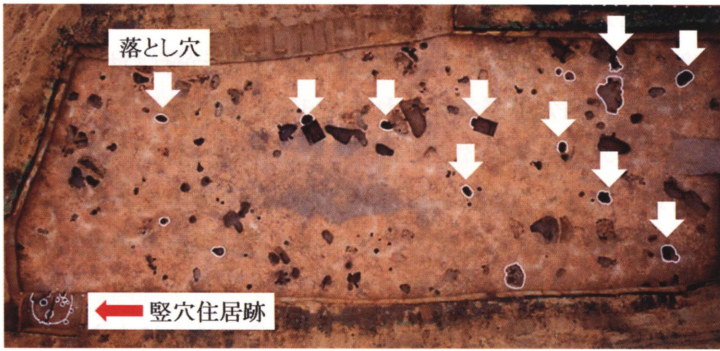
約7,500年前の地層からは、^{まいのうどき}埋納土器といって、地面に掘った穴に土器を納めたものが見つかりました。土器は、口を下に、底を上にした状態で見つかっていて、土器の底は打ち割られていました。なにかの儀式を行ったのかもしれませんが。



埋納されていた土器

出土品としては、縄文土器もたくさん見つっていますが、驚きの一品があります。それは、黒曜石の塊です。なぜこれが驚きの一品かということ、実は、この黒曜石は、現在の大分県、姫島で採れる黒曜石なのです（現在は国定公園のため姫島の黒曜石を採ることはできません）。普通、黒曜石は真っ黒いガラスの塊なのですが、この姫島の黒曜石は灰色がかっているのが特徴です。都城や鹿児島でも小さな破片や塊はよく見つかるのですが、伊勢谷第1遺跡の塊は500グラムと非常に大きく、姫島の黒曜石がどのようにして他の地域に流通していたのかを考える上でも非常に貴重な発見なのです。

また、約4,500年前の地層からは、落とし穴（狩りの時に獲物を追いこむワナ）や竪穴住居跡（家）も見つかっています。落とし穴は、10基が地形に沿って配置され、穴に落ちた獲物が逃げだせないように、穴の底には木や竹を刺していた跡もありました。



落とし穴（直径1～2m）

竪穴住居跡は、火山灰によって埋まった状態で見つかりました。この火山灰は、今から約4,200年前に、霧島の御池が大噴火した際に降り積もった軽石です。皆さんも御存知かもしれませんが、通称、ボラ（霧島御池軽石）といって、園芸などで使われるものです。この火山灰は市内の中央部でも1メートルくらい降り積もったことがわかっています。庄内地区ではおそらく2メートルくらいあるのではないのでしょうか。この大噴火の際にはすでに家には人は住んでいなかったと考えられますが、人が住まなくなってから、そう時間がたたないうちに噴火が起こったことが考えられるため、非常に貴重な発見といえます。その他に、焼いた石を集めた「集石」と呼ばれる、調理場の跡も見つかっています。

弥生時代の庄内地区

弥生時代の遺跡は、庄内地区に20箇所程度はありと考えられ、縄文時代の遺跡よりも、若干、台地の奥にまで分布が見られるようです。ただし、このうち実際に発掘調査を行ったのは大久保第2遺跡の1例のみになります。

大久保第2遺跡は、民間の老人福祉施設建設に伴い、約4,000平方メートルを調査しました。遺跡からは、弥生時代の竪穴住居跡や周溝状遺構と呼ばれるドーナツ状の溝などが見つかりました。竪穴住居跡からは、住居の屋根や柱に使われたと思われる木材が、炭になった状態で見つかりました。



弥生時代の竪穴住居

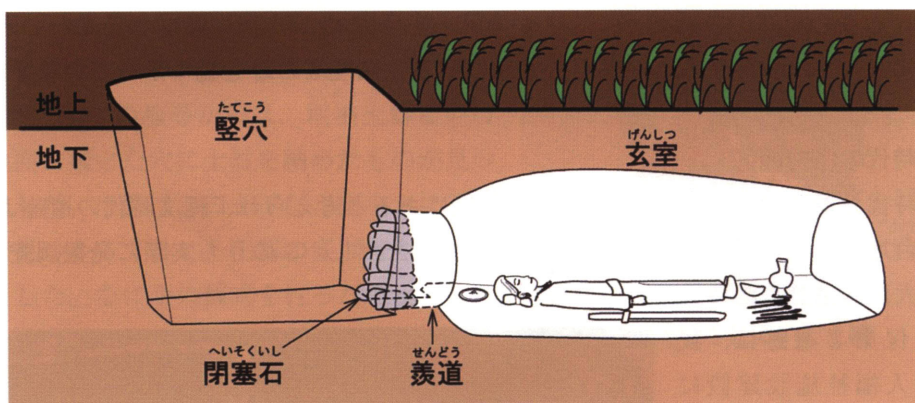
古墳時代の庄内地区

古墳時代の遺跡は、30箇所程度あると考えられますが、実際に発掘調査が行われたのは、菓子野小学校の南側にある菓子野地下式横穴墓群で、これまで17基が見つかり、16基が調査されています。

地下式横穴墓とは、その名の通り、地下につくられた古墳時代のお墓の事で、九州東南部に多く見られるお墓の種類です。都城では、これまで、高崎町・高城町・下川東・志和地地区・鷹尾町・菓子野町で地下式横穴墓が見つかっています。

地下式横穴墓の特徴は、地下に掘られたお墓で、前方後円墳のように地上に大きな盛り土がないため、お墓の場所が特定されません。よって、盗掘を受けている確率が非常に少なく、墓に納められた副葬品が、そのまま残されているという点があります。また、地下式横穴墓は、ボラ層中に遺体を納める部屋（玄室）が掘られるので、遺体が土と触れず、密閉される為、骨が残されていることが多いのです。

地下式横穴墓は、ひとつのお墓に複数の人の遺体を納めるのも特徴で、菓子野地下式横穴墓群では、16基のお墓からこれまで31体が見つかっています。この人骨の内訳は、男性8体、女性7体、小児6体、不明10体となっています。



地下式横穴墓の模式図

地面に竪穴を掘り、その壁面から横に玄室を掘る。竪穴と玄室の間には羨道があり、玄室の入り口は石や土で塞がれている。

先ほど、地下式横穴墓は地下に掘られ、地上に大きな盛り土が無いと述べましたが、最近の調査例からは、前方後円墳のような大きな盛り土は無かったが、多少の盛り土はあったかもしれないと言われています。また、実際、地下式横穴墓は、追葬といって、最初に無くなった人をお墓に納めてからある程度時間を置いて、また別の人を同じお墓に埋葬している例が見られます。つまり、お墓がどこにあるかわかっていなければ、出来ない事ですので、小さな盛り土か、木の杭かわかりませんが、何らかの目印はあったと考えられます。ただし、葺石や立石のような、後世に残るような目印ではなかったと考えられるのです。

菓子野地下式横穴墓群の近くには、昭和58年に指定解除されるまで、庄内古墳と言っ

て県の史跡に指定された古墳がありました但现在は消滅しています。また、地元の方にお聞きしたところ、昔は、もっとたくさんの塚があり、「塚」のついた地名があったという事ですので、当時は、もっとたくさんの古墳が築かれていた場所であったと思われます。地下式横穴墓は、いつ発見されるともわかりません。というのが、どこにあるかわからないため、トラクターなどで地面を耕した際に、たまたま地下の空洞が地上の重みに耐えられずに発見されることが多いからです。実際、平成23年度には二つの地下式横穴墓が見つかり、調査を行いました。そのうちの1つは、1つの入り口の坑に対し2つの埋葬する部屋を持つという非常に珍しいものでした。まだまだ、未発見の地下式横穴墓が眠っている可能性があるという事です。

菓子野地下式横穴墓からは、鉄の武器や南の海でしか取れない貴重な貝の腕輪等、当時の貴重品が見つかっています。これらは、当時の中央政権とのつながりを示すものでもある為、大和政権と都城との関係についても窺い知ることのできる遺跡といえます。また、人骨を観察することで、当時の人の身長や顔の特徴などを知ることができるのです。



竪穴と閉塞の石



貝殻の腕輪

奈良・平安時代の庄内地区

都城盆地には、非常に多くの奈良・平安時代の遺跡があります。庄内地区では、発掘調査が少ない為、あまり見つかっていませんが、大淀川流域やその支流である横市川流域では非常に多くの遺跡があります。金田町の大島畠田遺跡は、平安時代の地方豪族の屋敷と考えられていて、国の史跡に指定されています。

庄内地区には、10箇所以上の奈良・平安時代の遺跡があると考えられていますが、実際に調査を行ったのは2遺跡です。そのうちの1つである、伊勢谷第1遺跡では、素焼きのお茶碗やお皿が、まとめて見つまっているほか、ほぼ完全な形の土師器の甕（曾蔵骨器？）も見つかっています。

鎌倉・室町時代の庄内地区

庄内は、都城島津の元となる北郷氏が都城を治める際に拠点とした地でもあるため、この頃の遺跡が非常にたくさんあると考えられます。今回は、そのうち、実際に調査を行っ

ている安永城跡について御紹介します。

安永城といっても、発掘調査を行っているのは、安永城を構成する曲輪の1つである金石城跡です。中世の城跡で有名ですが、実は、それよりもずっと前の、縄文時代や弥生時代、古代の出土品も見つかっています。

写真は、調査を行った時に撮影した航空写真です。城の中央に延びている道路と、その両側には建物がたくさんあったことがわかります。

城は大きく4つの時期にわかれて使用されています。Ⅰ期は、15世紀前葉～中葉、Ⅱ期は15世紀中葉～後葉、Ⅲ期は16世紀代～17世紀前葉、Ⅳ期が17世紀前葉～後葉です。このうちに最も城が機能したのがⅢ期になります。

城跡からは、中国で焼かれた白磁や青花（染付）の食器類のほか、鎧の一部であるこざね小札や短刀といった鉄製の道具など、当時の生活を物語る出土品が見つかっています。



金石城空撮（北から）：曲輪の中央を南北に道路跡が通り、北側で鍵状に折れる。道路の左右には建物が立ち並ぶ。



○が建物の柱穴で、四角で囲まれた部分が建物

江戸時代の庄内地区

江戸時代、安永城の麓に地頭仮屋があったことを御存知の方は多いと思いますが、それ以外に40箇所くらいの遺跡があると考えられます。そのうち、これまで3箇所が調査されています。今回は2箇所の遺跡を御紹介したいと思います。

1つ目は、庄内小学校遺跡です。その名の通り、庄内小学校の屋内体育館建替えの際に発掘調査を行ったもので、江戸時代の後期～明治にかけての在地有力者の屋敷跡と考えられます。

遺跡からは、建物の他に井戸や池、道路跡が見つかっています。残念ながら、近・現代の削平を受けており、出土品はそう多くありませんでしたが、薩摩焼や唐津焼等の焼き物が見つかっています。



薩摩焼の甕

もうひとつは、平田かくれ念仏洞です。一向宗が禁じられていた時代に信者たちが隠れ祈った場所と伝えられています。都城には、庄内地区以外にも、高城町田辺、山之口町田島、山田町大古川、同平山にもかくれ念仏洞が残されています。

おわりに

遺跡（埋蔵文化財包蔵地）というのは、昔の人々が利用してきた場所の事です。地下にあるので、見つかっていない遺跡の方が多いという事です。よく、「遺跡があるから開発できない」「金と時間の無駄」「趣味で発掘をしている」といったことを言われます。確かに、現在の法律では、基本的に遺跡を破壊するような開発を行う場合、開発者側に費用の負担をお願いして発掘調査を行っています。御理解いただきたいのは、埋蔵文化財行政側としては、実は、発掘調査は行わず、そのまま保存し、後世に残すということを第一に考えているということです。発掘調査を行うと言う事は、遺跡を破壊すると言う事ですので、こちらとしても、できれば、遺跡を破壊しないような形での開発をお願いしています。それでも、調査をしなければならない場合にのみ調査を行っています。ですから、基本的に個人住宅の建設など、小規模の、地下に影響を与えない工事については、費用負担のない試掘調査と呼ばれる、数日で済む調査を行い、書類を提出していただく場合がほとんどです。

遺跡の範囲に入っていると嫌な顔をされることが多いのですが、遺跡があると言う事は、昔から利用されてきた土地という事です。東日本大震災の折、津波に襲われた範囲には、遺跡は1つも無かったという市があります。つまり、昔の人々は、どこが安全で暮らしやすいかということ、現代の私たちよりも知っていたと言う事ではないでしょうか。

全ての発掘調査が、世紀の大発見という事はありません。しかし、地域の小さな調査の発見の積み重ねが、地域の歴史であり、そして、日本の歴史になり、今の私たちにつながっているという事を心に留めていただきたいと思います。

また、近年、地域の歴史的遺産である史跡を活かしたまちづくりを行っている所が多いのですが、成功している例もあれば、そうでない例もあります。地域の史跡を活かすためには、地域の方々が、どれだけ正しく地域の歴史を理解するかにかかっていると思います。地域の正しい歴史を理解することで、おのずと、その地域の売りとなるものは何か、後世へと残し、伝えていかなければならないものが見えてきます。その点、庄内地区ではすでに庄内地区まちづくり協議会が中心となって、マップ作りや看板設置等、素晴らしい取組をされています。今後の活動も期待される地区といえます。

地域の歴史を次世代へと語り継ぎ、地域の歴史的遺産を守るのは、地域の方々です。そして、その手助けをするのが行政の役割だと考えています。文化財課としてできることは限られますが、これからも、少しでも地域の方々のお役に立てるように努めていきたいと考えていますので、何かあれば、また、お声をかけていただければと思います。

『庄内』第18号に投稿されたものです（平成24年12月刊行）

庄内の史跡

1. 関之尾の甌穴と滝
2. 庄内川
3. 安永城跡、仮屋跡
4. 金石城悲話
5. 山久院跡
6. 釣璜院跡
7. 平田かくれ念仏洞
8. 庄内の乱の古戦場跡（戦場原、小松ヶ尾）
9. 三島通庸公の町づくり
10. 三原叢五先生
11. お軍神
12. 庄内観瀾舎跡
13. 願心寺
14. 諏訪神社
15. 豊幡神社
16. 中央権現社
17. 東区菅原神社
18. 菓子野天神社
19. 母智丘神社
20. 八坂神社
21. 南洲神社
22. 川上神社
23. 乙房神社と田の神さあ



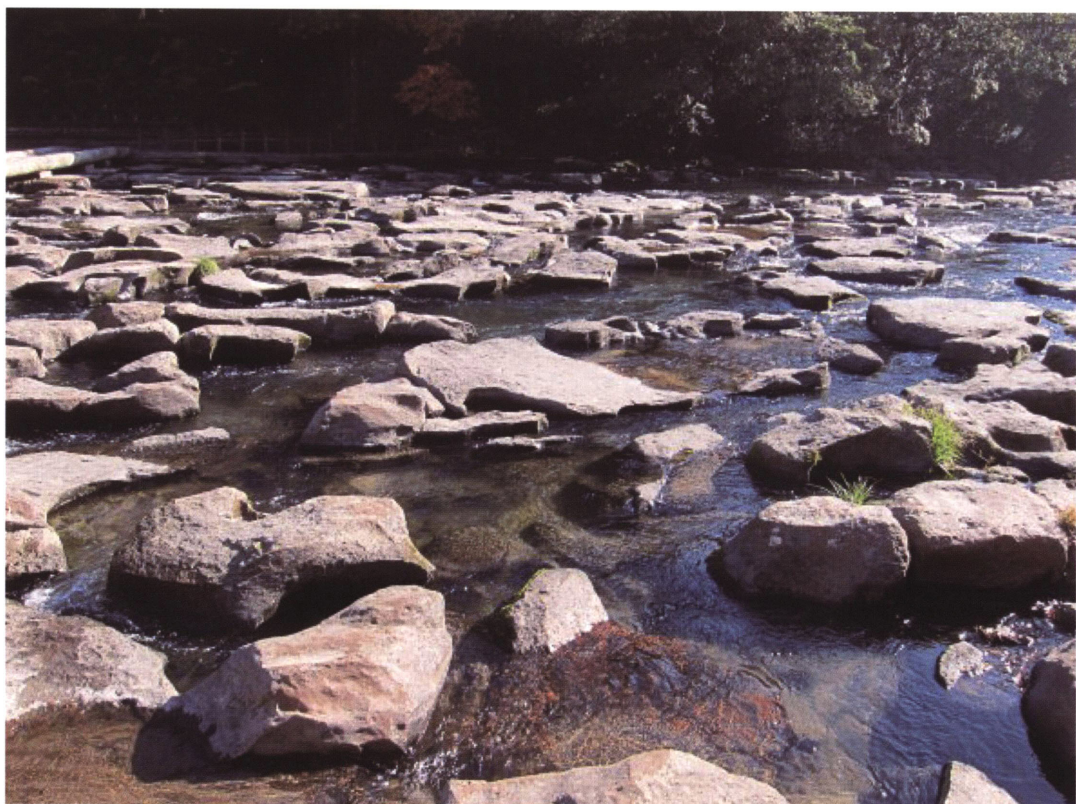
1. 関之尾の甌穴と滝

今から34万年前、現在の霧島連山の山容が形成される以前、加久藤火砕流と言われる大噴火の噴出物がこの地にも押し寄せて堆積し、冷えて出来た岩が溶結凝灰岩で俗に溶岩とされています。

関之尾の甌穴は、この溶岩の割れ目や隙間にはいり込んだ砂礫が、流れの力で回転し長い年月をかけて少しずつ岩を削りこのような形状になったものです。滝上延長600メートル最大幅80メートルに亘って広がる甌穴群はその数と規模が世界一と言われ地質学的にも非常に重要であるとして、昭和3年国の天然記念物に指定されました。

また、本滝は幅40メートル高さ18メートル、霧島山麓より湧出する豊富な水が涸れること無く雄大な瀑布を形成しており、昭和33年には母智丘関之尾自然公園として県の指定を受け、続いて平成2年には日本の滝百選にも入選した名勝滝であります。

なお平成22年9月には霧島連山が日本ジオパークに認定され、関之尾公園もその一連の区域として学術的にも貴重な存在として登録されました。



関之尾滝の甌穴群



朝日に輝く関之尾滝

関之尾滝を含む霧島連山一帯は、平成 22 年 9 月に「霧島ジオパーク」として日本ジオパークに認定されました。ジオパークとは、「ジオ」が地球や大地を、「パーク」が公園を意味していて、貴重な地形や地質に触れ、学ぶことのできる自然公園のことです。霧島は、日本初の国立公園として指定された雄大な景観、20 余りの多様な火山と火口湖、1,300 種に及ぶ植物、神話と伝説を持ち、古くから信仰の対象となった山々です。

市内各所のスポット「ジオサイト」では、火山が作り出した壮大な地形と自然の恵みを肌で感じることができます。

都城のジオサイト

関之尾滝（せきのおのたき）

小池（こいけ）

御池（みいけ）

ごろが轟（ごろがとどろ）

2. 庄内川

明治2年三島通庸^{みしまちつね}が庄内^{らいにん}に來任した時、庄内は台風により堤防が決壊して田地が流され住民は草根木皮^{そうこんぼくひ}で飢えをしのいでいたと言う記録がありますが、昔の庄内川は幾重にも湾曲^{きよくだうこう}蛇行して流れ、特に岡元辺りは崖下まで川が迫り台風の度に洪水となり堤防は決壊して稲田は流されその惨状は計り知れないものがあったと言います。ようやく大正3年この蛇行した暴れ川の蛇行を修正する改良工事が実施され翌大正4年に完工、しばらくは堤防の決壊や田地の流失は治まりましたが大正10年には上流神田ゴラの堤防が決壊、昭和11年になってまたもや川崎の湾曲部^{はんらん}が決壊し町下の田んぼ一面が泥の海と化しました。その後も台風襲来^{はんらん}のたびに氾濫を繰り返し耕作者の苦労は並大抵のものではありませんでした。特に終戦直後の超大型の枕崎台風をはじめとして毎年の台風は台風銀座と言われた宮崎県を必ず直撃し大打撃を与えて通過して行きました。中でも庄内川の氾濫による庄内町の被害^{じんだい}は甚大であった為、昭和25年度より宮崎県営で改良工事が着手され川身の修正、堤防の修築、川幅の増幅^{きょうりょう}、橋梁の改築^{えんてい}、堰堤の近代化等、長期間にわたる本格的改良工事が実施され昭和61年度を以てようやく完工しました。その後は盤石^{ばんじゃく}の堤防に守られ庄内町の母なる川、鯉のぼりの泳ぐ川として親しまれています。平田堰堤^{えんてい}と長岡の記念碑には、ここに至るまでの先人達の壮絶なる水との闘いをしのばせる歴史の一駒が刻まれています。

ちなみに庄内川は西岳荒襲^{あらし}にその源^{みなもと}を發し関之尾^へを経て庄内町の中央部を東に貫流して乙房で大淀川本流に合流しますが其の延長23.4キロメートル、途中支流6本が合流、改修された川幅は90メートルに増幅、木橋9基がコンクリート橋に改良されました。



平田の堰堤

3. 安永城跡、仮屋跡

山田町の古江から都島に進出した北郷家は第6代敏久の時、領内の北の守りとして安永城を築きました。庄内小学校の西側丘一帯に広がる城は本丸、二の丸、金石城、取添の4つの曲輪から成り、北郷家が自ら築造した領内最初の城でした。戦乱の時代が過ぎ、徳川政権の一国一城令で城郭は取り壊されましたが、その後は領内五口六外城の一つ安永郷の要として仮屋が置かれその機能を果たしました。城跡はこの地方特有の連郭式山城の原形を留める遺構として貴重な存在でしたが、現在は本丸のみが市の史跡に指定され管理保存されています。



現在の安永城址



地頭仮屋跡

4. 金石城 悲話

前項安永城の一曲輪金石城にまつわる悲話。第10代時久の長男相久は、戦国の時代、北郷家の浮沈をかける数々の戦いで武勇を馳せた時久の後継者でしたが、父時久の疑いを受け金石城に蟄居させられ、ついには兵を差し向けられて悲憤の自刃を遂げました。その後巷には怪奇の現象が起り、これが相久の霊のしわざと住民を恐怖のどん底におとしました。父時久は我が子を自刃に追いやったことを悔い相久の霊をしずめるため神社を創建し鎮霊に努めました。それでも異変は収まらず鎮霊はその後の領主数代にわたって行われました。この神社が岳の下の兼喜神社です。なお相久の廟は釣璜院跡墓地にあり、また金石城にあった自刃の場所の石囲いは平成4年、廟のある釣璜院跡に移されました。なお供養塔が陸軍墓地の一角にあります。



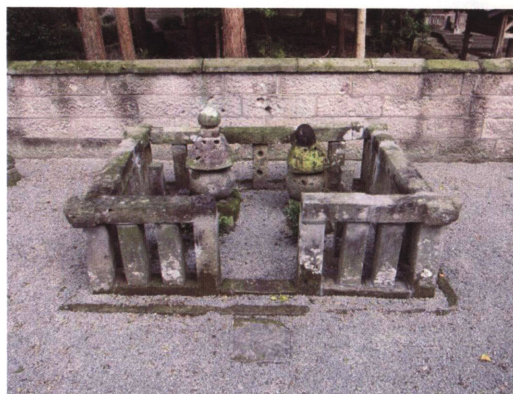
金石城から移設した石囲い

5. 山久院跡

鹿兒島島津家 4代藩主忠宗の6男資忠は戦功により北郷3百町歩を与えられ1352年山田町古江に館を構え領地の治政に当たりましたがこの地で没しました。没年不明ですが、元古江にあった夫妻の墓所山久院はその後庄内の現在地（庄内小学校東の直線道路突き当たり）に移され資忠夫妻の菩提寺として供養されて来ましたが廃仏稀釈で寺院は焼かれ五輪の石塔のみが現存しています。現在は庄内地区まちづくり協議会が管理しています。

6. 釣璜院跡

庄内地区公民館の道路を挟んだ東側住宅の裏にあります。都城領主7代数久の菩提寺跡ですが2代義久供養塔、4代知久、5代持久とその室、7代数久とその後室の墓、それに金城で自刃した相久とその乳母の墓が存在します。それに元金城にあった相久自刃の場所に造られていた石囲いも平成4年この墓地に移され市の指定史跡に認定されています。戦前、この周辺には苔むした古墓が数多くみられたものです。



山久院跡

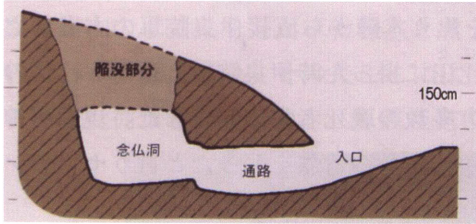


釣璜院跡

7. 平田かくれ念仏洞

藩政時代薩摩藩では一向宗即ち浄土真宗を徹底的に禁制しました。それでも信者たちは役人の目を盗んで洞窟の中などで信仰を続けました。この念仏洞は昭和49年に都城市の指定文化財となりました。このような念仏洞のうち、大半のものがすでに崩壊・埋没してしまっており、本洞穴は当時の状況を今に伝える数少ない貴重な例でしたが、平成2年の台風によって洞穴天井部分が陥没したため、崩落した土砂を取り除いて形状を実測した後、入口部分を除いて埋め戻されています。

この念仏洞は1974年に都城市の指定文化財となった。このような念仏洞のうち、大半のものがすでに崩壊・埋没してしまっており、本洞穴は当時の状況を今に伝える数少ない貴重な例であった。しかし、1990(平成2)年の台風によって洞穴天井部分が陥没したため、崩落した土砂を取り除いて形状を実測した後、入口部分を除いて埋め戻した。



崩落した土砂を取り除いた状態 1991年



平田かくれ念仏洞の案内看板

8. 庄内の乱の古戦場

慶長4年、天下分け目の関ヶ原の大合戦の前年のことです。当時都城盆地を支配していた伊集院家と宗家鹿兒島島津家が対立し約1年にわたって兄弟縁者が敵味方に分かれて骨肉相食んで戦ったのが「庄内の乱」です。

戦場原 第1回戦

金石城を守る伊集院軍の謀将白石永仙は45人の手勢を引き連れて、島津軍が攻め落として進出した山田城へ向かい遠矢を射かけました。山田城の島津軍2百余騎は直ちに城門を開けて繰り出し伊集院軍を追い駆けました。伊集院軍は適当にあしらいながら外堀まで後退して島津軍を戦場原に誘い込みました。前もって備えておいた伊集院軍の風呂谷とゲスが谷の伏兵は合い図のホラ貝で一斉に立ち挙がり島津軍に後から攻め掛かりました。三方から包囲されて攻められた島津軍は多数の戦死者を出してようやく脱出しましたがこの戦いは伊集院軍の策略に乗った島津軍の大敗北でした。

戦場原 第2回戦

志和地の森田に本陣を進めた島津軍は、金石城からおびただしい煙の上がるのを見て金石城の落城と誤認し、老将の制止も聞かず総大将島津忠恒自ら馬を進めました。案の定これは落城と見せかけて敵をおびき寄せる金石城の謀将白石永仙の策謀で、まんまとこれにはまった島津軍は前回と同様戦場原で伏兵に包囲され散々な目に遭いました。忠恒自身も敵に取り囲まれ危ない場面もありましたが家臣達の必死の防戦で辛うじて囲みを脱する事が出来ました。この日の戦いは島津軍の戦死者406人を出した歴史に残る激しい戦いでした。

稚児 桜

島津軍の若武者富山次十郎は稚児として皆から可愛がられ華々しく戦場を馳駆していましたが前記戦場原第2回戦で風呂谷の上で惜しくも敵弾に倒れました。その亡骸はこの地に葬られ敵味方の涙を誘いました。当時この美少年の供養のため植えられたと言う桜の

木はその後数百年爛漫らんまんと咲き匂い誰言うとなく稚児桜おうじと言われ往時しのを偲ばせて呉れましたが、昭和48年老齡のため枯死いたしました。今は庄内の昔を語る会の手で3代目桜を植栽し歴史を語る記念碑も建立こんりゅうし市の史跡公園として管理されています。(3代目桜も最近枯死)

小松が尾の戦い

森田に本陣を進めた島津軍は膠着こうちやく状態の戦況を焦り本陣から直接伊集院軍の本城都之城に攻撃を仕掛け兵を出しました。大根田から志比田おおねだ しびたに掛った時伊集院軍と遭遇、乙房の小松が丘まで押し返されここで大乱戦となり敵味方多数の戦死者を出しました。現乙房神社の南付近で今は整地されて昔の姿を留めませんが、多数の遺骸いがいを葬ったと言うセンカン山は近年まで人の足を踏み入れない寂しい所でした。

9. 三島通庸公の町づくり

明治の新政で都城島津家の旧政を打破するため庄内の安永城やすながじょうかりや 仮屋を役館とした通庸は庄内にまず商人町を造成して、引き続き志和地、山田方面から士族を移住させ家屋敷を造って与え、常備隊じょうびたいの編成、教育、産業の振興、道路の造成、堤防の築造、神社の修築特に母智丘神社の改築は有名ですが、これ等を僅かの期間で驚異的に達成し現在の庄内町の基盤を確立しました。廃藩置県はいはんちけんの令でわずか2年で庄内を去りますが彼が残した業績は誠に偉大で彼の遺徳いとくを偲ぶお軍神の「遺徳の碑」は市の史跡に認定されています。

10. 三原叢五先生

三島通庸は鹿児島から三原先生を呼んで庄内の子弟教育に当たらせました。三原先生の寺小屋で教育を受けた人たちは庄内の指導者として活躍しました。明治5年の学校令では庄内小学校の初代校長に就き、明治10年西南の役に従軍され、帰還後は菓子野分教場きょうべんが設立され、ここで晩年まで教鞭をとられ菓子野で没されました。



三島通庸遺徳の碑

11. お軍神ぐんじん

庄内小学校正門脇の小広場、樹齢5百年と言われる二本の一位いちい檜がしの巨木と数基の石碑が建っています。三島通庸はここにあった稲荷いなり神社を三股に移しその跡地に武の神鹿島神社を勧請し金石城にあった金石大明神こうしを合祀して庄内鹿島神社を創建しました。鹿島神社の祭神は建御雷たけみかづちの神と言う軍の神様、そして武勇を馳せた北郷相久の霊を祀った神社でしたから庄内ではここを「お軍神様」と言うようになりました。明治35年この神社は諏訪神社に合祀されました。その後ここには三島通庸遺徳の碑、征清記念碑、日露戦役記念碑、日露戦役従軍者の刻名碑、三原叢五先生顕彰碑、庄内空襲の碑が建てられています。



お軍神

12. 庄内観瀾舎跡かんらんしゃあと

JA庄内支所敷地の東南の隅に剣道場、柔道場の2棟からなる観瀾舎がありました。明治18年庄内の子弟に中等教育を施す目的で自主的に設立された観瀾書院は、その後学制制度の改革等に伴って改変を繰り返しながら運営されて来たようですが、都城に中学校、商業学校、次いで農学校が創立されるに及んで、庄内からこれ等学校に通学する中等学校生の結社けっしゃとなり、上級生が下級生を指導するいわゆる郷中教育ごじゅうになった運営がなされました。時代が戦時色をおびる頃からは観瀾舎も軍国主義的国策に沿った心身鍛錬たんれん まなびやの舎として当



時その厳しさは衆目の認める所で模範的結社として近隣に名を馳せ、多くの有為の人材を輩出しました。昭和20年終戦によりその目的を失った観瀾舎は学校側の強い指導もあり閉鎖されました。

13. 願心寺 がんしんじ



明治9年、宗教の自由令が^{はっふ}発布され、永い間厳しい弾圧に耐え抜いた浄土真宗もその禁制が解かれました。この地方でこれにいち早く応じて建ったのが願心寺であります。明治11年現在地に^{かりせつきょうじょ}仮説教所が設けられ布教が始まりました。その後門徒総出で霧島国有林から^{けやき}樺を運び出し6年の歳月をかけて明治39年「総樺造り」の本堂が完成しました。大正になってから山門、鐘楼と整備されましたが、平成16年にはこの本堂の建築様式の文化価値が認められて国の登録有形文化財に認定されました。また山門をはじめ寺院の外周を固める石垣は近隣に類を見ない壮観を呈しています。



国の登録有形文化財の山門

14. 諏訪神社

東区の高台に鎮座する諏訪神社は、^{ぶんな}文和4年（1355年）に北郷三百町歩を領した都城島津家初代領主北郷資忠が、領内の氏神として最初に創建した由緒ある神社です。毎年の例祭は歴代領主が主宰し藩政期を通じて領民参集の元で例規に則り厳粛に行われて来ました。明治になってからは村社として管理され大正13年には階段下にあった社殿は丘上の現在地に遷され庄内地区の鎮守様として、また市の認定史跡として管理されています。



15. 豊幡神社

都城7代領主北郷^{かずひさ}数久の時代、島津家と伊東家は飢肥城争奪戦に明け暮れていました。業を煮やした島津宗家は伊東家と交渉し飢肥城を島津家が確保する代わり三股千町を伊東家に譲る事で交渉が成立し都城領であった志和地城も伊東家に譲る事になりました。数久は志和地城にあった応神天皇を祀る八幡神社を現在地（庄内小学校東地直線道路の突き当たり）に遷したと言われています。明治3年三島通庸は諏訪神社、鹿島神社、豊幡神社を村社にしま



した。毎年の祭礼には今でも都城島津家の奉幣が続いています。

16. 中央権現社

ちゅうおうごんげんしゃ

宮島地区の鎮守様として区が管理している中央権現社は、都城島津家 25 代領主島津久静^{ひさなが}の命によりお家の武運長久、五穀豊穰、牛馬繁盛祈願の為創建されたものです。当時の位置が現在地と多少違いますが領内の中央に位置するので中央権現と命名されたようで戦前の祭礼は都城盆地各地から多くの参拝客を迎え大いに賑わったそうです。



17. 東区菅原神社

荘内郵便局前の直線道路を北に向かう中程、東に折れた路地奥に鎮座しています。菅原道真公を文教の神として祀る社は全国 1 万 2 千社を数えると言われ、平安時代中期から現在に至るまで広く信仰崇拝されています。この天神様は説明板に依れば、明治初期、三島通庸公が庄内文教の基を建てるため志和地科長神社から遷したとありますが、ここに鎮座するまでには色々経緯があったようです。ともあれ現在では庄内の文教守護神として尊崇されています。



18. 菓子野天神社

菓子野公民館脇に鎮座、鉄筋コンクリートの整った形の社殿です。旧社殿は萱葺きの粗末なものだったそうですが昭和 38 年に改築されたものです。古老の話ではこの天神様は元菓子野から引土橋^{ひきつち}に下る坂辺りにあったもので、あの付近を天神山、またあの坂を天神坂と言っていますので確かな事と思います。

明治 3 年庄内に来られた三原^{そうご}叢五先生は西南戦争から帰還された明治 11 年から、庄内小学校の菓子野分教場で教える事になりましたが、その頃、天神様を分教場の隣の現在地に移されたと言われ現在に至っています。



19. 母智丘神社

明治 2 年庄内の安永城^{やすなが}の仮屋^{かりや}で新しい明治のまちづくり当たった三島通庸^{みちつね}は『民治の要^{みんち}かなめ

『^{けいしん}は敬神に在り』として敬神思想の高揚に^{こう}努め、郷内の神社の修築等を推進し民心の安定を図った事は大きな業績の一つでもあります。なお三島は昔から地域住民が信奉する横市の石峯稻荷を修築し母智丘神社と改名して上荘内郷の郷社としました。この母智丘神社創建に関する件について庄内仮屋より鹿児島藩庁に提出された報告書の内容はこの神社を知る上で貴重な存在と言えます。明治5年都城県設立に伴い県社となり、その後は時代と共に変遷を重ねましたが母智丘神社の存在は現在に至るも地域住民心のよりどころとして市の認定史跡としても健在であります。



20. ^{やさか}八坂神社

願心寺山門の道路を挟んだ向かい側の小高い場所、赤い鳥居に赤い社殿、これが庄内八坂神社です。願心寺の境内に昔から由緒不明の^{ほころ}祠があり、これが山門建設の邪魔になってここに移されたものです。町区有志の発案で由緒不明のこの祠をこの際^{しょうばいはんじょう}商売繁盛の神様として町区^{ちんじゅさま}の鎮守様にする事にし、早速京都祇園の八坂神社の御霊を^{ごん}勧請して社を^{やしろ}新築したのが大正8年の事です。その後町区では毎年の祭礼は京都本社^{だし}の伝統にならって山車を繰り出し盛大なお祭りを行っています。



21. ^{なんしゅう}南洲神社

当時、区の鎮守様を持たない西区では、昭和二年、西郷南洲（隆盛）没後50周年を記念して南洲翁^{なんしゅうおう}の御霊と庄内出身戦没者56柱の^{まつ}霊を祀る神社を創建して区の鎮守様を建てる^{けんぎ}建議がなされました。たまたま大正13年に建て替えられた諏訪神社の旧社殿を譲り受け、区民総出で城山の一角に敷地を造成して準備を整えましたが、鹿児島諏訪神社からの分霊が難しく昭和4年^{しょうや}漸く区民歓喜の中で遷座が行われました。その後社殿は昭和53年不慮の失火で焼失しましたが55年再建され現在に至っています。ちなみに南洲神社は鹿児島本社と沖永良部島と山形の酒田市と庄内の四社があります。なお現在酒田南洲会と庄内南洲神社^{うじこ}氏子との交流が続いてい



ます。

22. 川上神社

関之尾の滝展望台脇に家形埴輪を模った朱塗りの神社があります。貞享2年都城島津家老川上久隆は殿様の命を受けて現地に乗り込み南前用水路、北前用水路を完成させますが、いつの頃からか関之尾住民は川上久隆を水神様に見立て、用水路の無事と毎年の豊作を祈願する水神祭りを続け今日に及んでいます。昭和37年には都城観光協会がこの水神様と南前、北前用水路を興した都城第18代領主島津久理、前田用水路と北前用水路の開削改修に貢献した坂元源兵衛そして前田用水路を完成に導いた前田正名の4御霊を祭神として建立したのが川上神社であります。



23. 乙房神社と田の神さあ

乙房小学校の南小松ガ尾台地に登る中腹、児童公園上に鎮座するごく新しい社殿、これが乙房神社です。説明板によりますと昭和52年、踏切脇にあった妙見大明神、田の神、馬頭観音を祭神とする妙見神社を現在地に移転する時区内にあった庚申塔と菅原道真公の霊碑を合祀して乙房神社としたとあります。7月11日を祭日と定め乙房地区の鎮守様として鎮祭尊崇し六月燈も盛大に催行されています。

また、神社の右奥には田の神様が鎮座しておられます。田の神様は稲作の豊穰をもたらす神様です。全国にその信仰がありますが、それを石に刻んで像を造っているのは鹿児島藩領だけです。約2,000体あるといわれ、都城市内だけでも約170体確認されています。

その形も神官型、農民型、僧侶型といろいろあります。乙房の田の神様はシャモジと茶碗を持った農民型で、都城地方に一番多いタイプです。

お米がたくさんとれる地域の「田の神様」は、オットイ（盗み）にあっていました。しかし、おとった地域は必ず手紙を置いて拝借したことを謝り、後日元の場所に戻さねばならないという決まりがあったようです。また、オットイに遭わないように個人の屋内に安置して祀り、しかも毎年当番を変えるなどした地域もあります。



庄内の民俗芸能

1. 関之尾の夫婦踊（みとおどり）

貞享^{じょうきょう}3年（1686年）3月12日、都城領主16代島津^{ひさみち}久理の命により開削された南前用水路の竣工祝賀で披露されたのが始まりといわれています。夫婦踊は、夫婦の姿で踊られ、手に蛇の目の傘を持って踊るため傘踊とも呼ばれています。



庄内小学校児童による踊り

2. 川崎の水道音頭（すいどうおんど）

川崎の上の原は井戸が深く水汲みが大変でしたが昭和31年みんなの協力が実って水道が敷設されました。この喜びと感激を忘れないよう作詞され振り付けされたのがこの踊りです。



庄内小学校児童による踊り

3. 千草の奴踊（やっこおどり）

菓子野町の千草奴踊はその昔、島津の琉球攻めに従軍した志々目某が伝えたとも、いつの頃か千草地区に来た旅芝居の役者が教えたとされますが、その由来は定かではありません。千草奴踊は手踊りとも言われ上体を起こしたまま手足で踊る特徴があります。踊り子は千草地区の女子小学生「おなごんこ」で、毎年、卒業生や新入生の数でその人数は変わります。



4. 今屋の俵踊（たわらおどり）

この地区で昔から踊られていた豊年踊りですが、昭和 57 年婦人会発足に伴いこれを伝承する組織が確立され婦人会の皆さんによって踊られていましたが、今は菓子野小学校児童によって踊り継がれています。



菓子野小学校児童による踊り

5. 東区の熊襲踊（くまそおどり）

竹編みの「バラ」を叩きながら踊る民俗芸能で、「バラ踊」とも呼ばれます。バラを抱えた14人が輪となり、互いに逆回りしながら鉦やバラを打ち、「高い丘おら熊襲じゃないか 鬼か鬼人か化け物か」などとうたい、走り、転がりながら野性的かつユーモラスに踊ります。その由来はよく分かっていませんが、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）の熊襲征伐の際の踊りにつながるともいわれています。宮崎県の指定無形民俗文化財に登録されておりま



熊襲踊保存会による熊襲踊



庄内小学校児童による熊襲踊

6. 町区の相撲甚句踊（すもうじんくおどり）

明治39年願心寺の本堂が竣工しその落慶法要と祝賀の日に奉納されたのがこの踊りです。踊りは当時お寺の工事に当たっていた宮大工某の指導を受け町区の婦人会が習得して踊り継いでいます。相撲の儀礼を踊り化したもので、行事、踊り手、三味線、太鼓、拍子木、歌い手で構成されます。



7. 町区の祇園山車（ぎおんだし）

大正8年庄内八坂神社が創建されたとき、当時願心寺山門の建築工事に来っていた京都の宮大工達が庄内の若者達を指導して「京都祇園山車風」に町を練り歩いたのがその起こりと言われています。しばらく途絶えていましたが近年見事に復活を果たしました。



8. 西区の南洲太鼓（なんしゅうだいこ）

南洲神社は西南戦争で戦死した庄内出身者 56 名と西郷隆盛翁の御霊を祀った社で昭和 4 年に建てられました。この神社が出来たとき当時の若者達は太鼓を打ち鳴らしてその感激と喜びを表したのが始まりです。長年途絶えていましたが昭和 60 年復活しました。



庄内小学校児童による演奏

9. 関之尾しぶき太鼓（せきのおしぶきだいこ）

昭和 8 年「庄内親愛会」が結成され、前田用水路の建設に尽力した坂元源兵衛翁の立像が関之尾の丘に立てましたが、この像の除幕式の祝賀会で関之尾青年団が、五穀豊穰・水争いの根絶などを願い、太鼓の演奏を奉納しました。その後太平洋戦争勃発により休止しておりましたが近年復活しました。



10. 今屋の大太鼓踊（うでこおどり）

鈴川（菓子野小学校付近）であった合戦の死者を鎮めるために始まったとも、豊臣秀吉の朝鮮出兵が始まりとも言われています。また、昔は「雨乞い」の時に踊ったとも伝えられています。大正時代にいったん途絶えましたが、昭和43年に復活しました。目から下を隠す「おめかくし」をつけた鉦（かね）3人を中心に、矢旗を背負った太鼓14人が輪をつくり、「神の弁天しばやは、お札を持たねば通られますまい」などと歌いながら踊り歩きます。都城市の指定無形民俗文化財になっております



11. 乙房の奴踊（やっこおどり）

奴踊りは、旧島津領内で古くから踊られている風流小唄踊りの一つで、唄やはやし、楽器に合わせて上体を前後にゆすったり、首を左右に傾け前進したりするユーモアたっぷりの踊りです。乙房小学校では奴踊りや三味線の伝承活動を行っています。



12. 上川崎の馬踊（うまおどり、じゃんかん馬）

由緒は定かではありませんが地区の馬頭観音祭り等で踊り継がれてきました。馬の背には花飾りに米俵、山の神の使いである猿の縫いぐるみを乗せます。多くの踊り手たちが馬の廻りで踊る大変華やかな踊りでしたが、現在は休止中です。



13. 平田の手綱踊（たづなおどり）

一本の手綱で「輪」をつくり家庭の和、地域の和、そしてふれあいの輪を広げようと昭和50年につくられました。この手綱の輪が大きな「和」になることを願って楽しく踊っていましたが、現在は休止中です。



庄内の歴史年表

時代	西暦	和暦	出来事
縄文石器			丸山遺跡古代人の竪穴住居跡
弥生	～ 400		庄内バラ踊りの起源（伝説）
古墳	400～500		庄内古墳（円墳）この地方に住んだ豪族の墓
大和	702	大宝 2	日向、薩摩の国が置かれる
平安	1026	万寿 3	平季基 梅北益貫に館を構え水俣院島津荘を拓く
鎌倉	1196	建久 7	惟宗忠久、日薩隅の守護職となり祝吉に役館を構える 地名にちなんで島津姓を名乗る 鹿児島島津氏の祖
南北朝	1352	文和元	島津資忠、北郷 300 町を領し山田の古江薩摩迫に入り、 北郷姓を名乗る 都城島津氏の起り 資忠薩摩迫で没す 墓は山久院にある
	1355	文和 4	資忠、諏訪神社を庄内に勧請、今日に至る
	1375	永和元	2代義久、宮丸蔵人から居城を譲られ改築して 都之城と称した 現在の城山都城の地名の起り
室町	1468	応仁 2	5代持久、安永城を築く 内城 新城 今城 金石城 鶴翼城とも言う 持久安永城で没す 墓は釣こう院にある
	1476	文明 8	6代敏久、安永城から都之城に移る
	1500	明応 9	7代数久 豊幡神社を野々美谷城から庄内に移す
安土桃山	1578	天正 6	北郷相久 跡目争いで讒を受け金石城で自刃 墓は釣こう院
	1595	文禄 4	伊集院忠棟 都城を領す 北郷氏祁答院へ転封される
	1597	慶長 2	鹿児島島津 17代義弘、一向宗禁止の掟を発令 隠れ念仏起る
	1599	慶長 4	忠棟殺され、その子忠真都城で反す 庄内の乱起る
	1600	慶長 5	庄内の乱鎮定 12代忠能 祁答院より都城に復帰
江戸	1615	元和元	一国一城令により安永城も廃城となる
	1663	寛文 3	17代忠長、島津姓を名乗る（現久友氏は 29代目）
	1685	貞享 2	18代島津久理、家老川上久隆に命じ南前用水路を開削 川上紳社の祭神 島津久理、前田正名 坂元源兵衛
	1867	慶応 3	戊辰の役 都城隊出陣 安永川の大氾濫 大飢饉襲う
明治	1868	明治元	廃仏毀釈の断行 庄内のお寺は総て取り壊しに遭う
	1869	明治 2	版籍奉還 26代元丸（久寛）家格を返上鹿児島へ移る
			三島通庸、都城地頭として来郷 庄内に役館を構える
			三郷分割、大支配を断行し庄内の町造りを精力的に行う
	1870	明治 3	三原叢五先生を招聘し寺小屋を開設 庄内小学校の前身
	1871	明治 4	都城県がおかれる
三島地頭庄内を去り東京へ			
1872	明治 5	学制制定 庄内小学校開校	

時代	西暦	和暦	出来事
明治	1873	明治 6	都城県が廃止され宮崎県に編入される
			乙房小学校開校
	1876	明治 9	宮崎県が廃され鹿児島県に編入される
	1877	明治 10	西南の役起る 庄内郷から出陣 244 人 戦死 56 人
			菓子野分教場（小学校の前身）設立
	1883	明治 16	鹿児島県からの分県運動が実り現在の宮崎県が出来る
	1884	明治 17	願心寺の寺号公称と大河内彰然の住職辞令が下附される
	1886	明治 19	板元源兵衛、関之尾用水路開削に着手
	1888	明治 21	町村制公布 庄内郷の中の安永の地域が庄内村となる
	1894	明治 27	日清戦争起る
	1899	明治 32	前田正名、板元源兵衛の用水路を引き継ぐ
	1902	明治 35	坂元英俊を国会議員に選出 四期
	1903	明治 36	前田用水路開通 庄内、志和池の水田に灌水
	1904	明治 37	日露戦争起る
	1906	明治 39	願心寺の本堂建築完成現在に至る
1908	明治 41	歩兵六四連隊、葦原に設置	
大正	1913	大正 2	国鉄吉都線都城から乙房を通り小林まで開通
	1914	大正 3	桜島大爆発 避難者庄内にも移住
			第一次世界大戦起る
	1919	大正 8	庄内小学校火災に遭い全焼 翌年新校舎落成
	1922	大正 11	宮田孝之助、乙房小学校に校舎一棟を寄贈
1924	大正 13	庄内町制施行 都城市制施行	
昭和	1927	昭和 2	関之尾のおう穴群 国の天然記念物に指定される
	1929	昭和 4	鹿児島南洲神社に分霊を請願し庄内南洲神社を創建
	1931	昭和 6	満州事変勃発
	1937	昭和 12	日支事変勃発
	1941	昭和 16	太平洋戦争勃発
	1945	昭和 20	庄内空襲 小学校一帯焼失 終戦
	1947	昭和 22	新制庄内中学校発足する
			国鉄日向庄内駅が出来る
	1952	昭和 27	持永義夫を国会議員に選出 二期
			庄内町、西岳村と合併、荘内町となる
1956	昭和 31	庄内町、西岳村と合併、荘内町となる	
1965	昭和 40	荘内町都城市に編入合併	

都城島津家歴代当主

代数	名	生 年		死 去 年		享 年
1	北郷 資忠 (すけただ)	不詳	--	不詳	--	不詳
2	北郷 義久 (よしひさ)	不詳	--	不詳	--	64
3	北郷 久秀 (ひさひで)	不詳	--	応永元	1394	不詳
4	北郷 知久 (ともひさ)	不詳	--	不詳	--	64
5	北郷 持久 (もちひさ)	応永 16	1409	文明 2	1470	62
6	北郷 敏久 (としひさ)	永享 2	1430	明応 9	1500	71
7	北郷 数久 (かずひさ)	不詳	--	大永元	1522	不詳
8	北郷 忠相 (ただすけ)	文明 19	1487	永祿 2	1559	73
9	北郷 忠親 (ただちか)	永正 2	1505	元亀 2	1571	67
10	北郷 時久 (ときひさ)	享祿 3	1530	慶長元	1596	67
11	北郷 忠虎 (ただとら)	弘治 2	1556	文祿 3	1594	39
12	北郷 忠能 (ただよし)	天正 18	1590	寛永 8	1631	42
13	北郷 翁久 (おきひさ)	慶長 15	1610	寛永 5	1628	19
14	北郷 忠亮 (ただすけ)	慶長 19	1614	寛永 11	1634	21
15	北郷 久直 (ひさなお)	元和 3	1617	寛永 18	1641	25
16	北郷 久定 (ひささだ)	正保元	1644	寛文 2	1662	19
17	島津 忠長 (ただなが)	正保 2	1645	寛文 11	1670	26
18	島津 久理 (ひさみち)	明暦 3	1657	享保 12	1727	71
19	島津 久龍 (ひさたつ)	延宝 6	1678	元文 5	1740	63
20	島津 久茂 (ひさもち)	宝永 8	1711	安永 3	1774	64
21	島津 久般 (ひさとし)	寛保 3	1743	宝暦 11	1761	19
22	島津 久倫 (ひさとも)	宝暦 9	1759	文政 4	1821	64
23	島津 久統 (ひさのり)	安永 10	1781	天保 5	1834	54
24	島津 久本 (ひさもと)	享和 3	1803	明治元	1868	66
25	島津 久静 (ひさなが)	天保 3	1832	文久 2	1862	31
26	島津 久寛 (ひさひろ)	安政 6	1859	明治 17	1884	26
27	島津 久家 (ひさいえ)	明治 10	1877	大正 11	1922	46
28	島津 久厚 (ひさあつ)	大正 7	1918	平成 26	2014	96
29	島津 久友 (ひさとも)	昭和 33	1958			

庄内歴史読本

平成二十九年三月十五日 刊行

庄内地区まちづくり協議会
宮崎県都城市庄内町一二六九二番地
刊行・編集

庄内地区公民館内
電話（〇九八六）三七―三四八八番

株式会社文昌堂

宮崎県都城市都北町七一六六番地
印刷
電話（〇九八六）三六一六六〇番



庄内地区まちづくり協議会

名前
